
ファンタシースターポータブル2∞ 偽神達の転生（日常編続き）

コーラ大好き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタシースターポータブル2∞ 偽神達の転生（日常編続き）

【Nコード】

N5272Y

【作者名】

コーラ大好き

【あらすじ】

コーラ大好きシリーズ。日常編続き。

“狂神の信念”

から1年後……

新たな事件を予感しながらも、

主人公ファントムはいつもの日常を過ごしていた。

しかし“制裁者”と呼ばれる存在と遭遇し、心に重くのし掛かる戦いに身を投じていく……

孤独、絶望、

嘘、悪……全ては仲間の為に背負う……

0 章：裏　　ゝ転生ゝ（前書き）

祝！！

第三部目！！

でも3作品目から変に感じる物です。

（個人の意見ダヨ）

オリキャラが4人程出てくるんですが、プロフィールは次話で書かせてください。

0 章：裏　　転生

どこかの建物

ある一室に、ビーストの男がイスに縛られている。
部屋自体は小綺麗だ。

扉がノックされ、ビーストの男が反応する。

カザ

「チヨリース！
元気ですか？

ゴールドさん」

ゴー

「いつまで私を監禁するつもりだ……
何人かのヒトに会わせ、それっきり来なかったが……
何しに来た？」

カザ

「そろそろ良い頃合いなんすよ！
ちよっと待って下さいよ」

部屋の外から大きな袋と、重そうなアタッシュケースを持ってきた。

ゴー

「何だ？」

カザ

「ゴールドさんの好きな物っす。
それい！」

袋の中身を全てぶちまけた。
中身は宝石、金塊、骨董系のメダルと
高価な物ばかりだ。

ゴー

「！！！！」

カザ

「こっちも！」

アタツシユケースを開け、中身の札束を掴んだ。
それをばらまき、宙に金が舞った……

ゴー

「か……金……金！」

カザ

「そうです！ アンタが好きな金ですよ！」

ゴー

「うう、オオオオ……」

ゴールドはうめき声をあげる……

カザ

「アンタは

ゴールド・シルバシノ

思い出して下さい！

俺達の指命を！！」

ゴー

「グアア…ウツ……

アアアアアア！！！」

叫び声が止むと、首をダランと落とした。

カザ

「大丈夫ですか？」

ゴー

「……………」

大丈夫だカザリ。

さっさと拘束を解け」

カザ

「ヘイヘイ」

拘束具を外し、ゴールドを自由にする。

ゴー

「ふむ、この拘束方法と器具……
アンナはすでに？」

カザ

「来てるっすよ。」

まだ人数は足りないって感じですけど……

……あ、掃除面倒なんでゴールドさんの部屋はここっすよ」

ゴー

「構わん。

金に埋もれて寝るのは良いものだ」

ゴールドは近くにあったお札をポケットに仕舞うと、カザリと一緒に部屋を出ていった。

建物内 会議室

楕円形の大きなテーブルに、12脚のイス。

イスに座っているのは3人……

カザリとゴールドで5人になる。

イスに座り、メンバーを確認する。

ゴー

「まだ5人か……」

アンナ・ザ・ブラッド

シェリー・エクスタシー

ロドリゴ・ゼル大佐

カザリ・イリオン

そして私……

……7人も足りないな」

カザ

「今探してる最中っす」

アンナは手錠をクルクル回している。

シェリーはエロ本を読んでいる。

ロドリゴはヤスミノコフ0002を手入れしている。

ゴー

「そうは見えないが？」

カザ

「実際面倒なんす。

でも“虚実”以外の居場所は判明してますよ」

ゴー

「どこだ？」

カザ

「“王権”がガーディアンズの刑務所。

“完全”“愛”“死”

“運命”がリトルウイング。

“食”は1年前の事件のせいで体が存在しません」

ゴー

「“食”はOFMになったんだっとな。

“虚実”の力ならどうにかなるかもしれんが……

……………

シヌは私達の邪魔しかないな」

シヌという言葉に強く反応する4人。

ゴー

「地獄で復讐出来るかと思ったが……

……フン、いつか果たす時が来るだろう」

カザ

「そうっすね……

……………

さて、最初は“王権”から連れ戻しましょう。

ニューデイズのガーディアンズ刑務所です。

……………

始めましょう……

制裁の時っす」

さっきまでやる気の無かった3人が目の色を変え、武器を手にとつて部屋をあとにした。

彼らは転生した……

下らないエゴの為に……

少なくとも……

彼らが行う事は、神がする事ではない……

そのような事はヒトしかないからだ……
つまり彼らは偽神……

偽神達は転生した。

0 章：裏　　ゝ転生ゝ（後書き）

最後の何なんだ？

小説内に出てきた“○○”などは、
制裁者の信条みたいなイメージです。
違う奴もいるけど。

ゝ拒絶、金、拷問、欲情、戦争ゝ（前書き）

緊張感無い書き方だなゝ

（拒絶、金、拷問、欲情、戦争）

カザリ・イリオン
Lv?

性別・男性

年齢・18歳

種族・ヒューマン

身長・175cm

体重・61kg

タイプ・“拒絶”

髪・チャライ 茶（染色）

服装・日によって違うが

チャライ

所属・twelve punisher

何から何までチャライ男性。

ファントムの前では紳士になる。

半年前まで高校に通っていた青年。

しかし行方不明になる。

行方不明になった数日後……

ローグスのビーストの男性と銀行強盗を働く。

ビーストの男性を裏切り、屋上に居るところをルシフェルに見つか
る。

（故意）

意味深な言葉を残した後、奪った金品を持ち去った。

因みに、裏切られたビーストはガーディアンズの留置場に居たが、死亡している……
殺したのはカザリ。

ゴールド・シルバシノ
Lv?

性別・男性
年齢・45歳
種族・ビースト
身長・179cm
体重・70kg
タイプ・“金”
髪・丸刈り(6mm)、黒
服装・スーツをだらしなく着ている
所属・twelve punisher

喋り方と雰囲気は大人しいが、金や高価な物を見ると目の色が変わる。

モトウブの大富豪で、表だった仕事から裏の仕事にも精通している。

ファントムに対して、緩く接する。

アンナ・ザ・ブラッド
Lv?

性別・女性

年齢・27歳

種族・ニューマン

身長・174cm

体重・58kg

タイプ・“拷問”

髪・セミロング、赤

服装・ルナプロフェシー

黒

所属・twelve punisher

超ドSなニューマンの女性。

喋り方も相手を見下した感じ。

カザリと同じで、ファントムに対して忠誠の雰囲気がある。

ザ・ブラッドは
コードネーム。

フルネームを知るヒトは制裁者だけだが、他言無用らしい。

グラール教団の裏組織の一員で、異端者や破戒した者を拷問する。
(カレンやルツは知らない)

普段から鞭とボウガンを携行している。

シェリー・エクスタシー
Lv?

性別・女性

年齢・製造から14年

種族・キャスト

身長・140cm

体重・28kg

タイプ・“欲情”

髪・ツインテール、橙

服装・セーラー服

所属・twelve punisher

性欲求に物凄く興味があるキャストの女の子。

快楽を知る為にボディを改造し、性行為が出来る。

元は記憶機能をヒトに近づけたタイプのキャストで、学校に通っていた。

シェリーはファントムに忠誠と言うよりかは、男性として見ている。
基本的にエロ本、官能小説を読んでいる。

ロドリゴ・ゼル
Lv?

性別・男性

年齢・75歳

種族・デューマン

身長・190cm

体重・87kg

タイプ・“戦争”

髪・目立つオールバック

白髪

服装・緑の軍服

所属・twelve punisher

元軍人のデューマンの老人。
最終階級は大佐。

話し方は「儂」や「お主」と言う。

数週間前まで隠居生活を送っていたが、
t w e l v e p u n i s h e r の制裁者になっている。

戦闘狂な一面があり、70代とは思えない動きをする。

ファントム対して嫌悪感があるが、どういうわけか従っている。

“ 12人の制裁者”

キリスト教における地獄の長……

堕天使ルシフェルが構成した12人の男女。

ファントム、エミリア、ナギサ、シズルも制裁者だが、そのような
自覚は無い。

それぞれに

“ 王権” “ 運命” “ 食”

“ 金” “ 拒絶” “ 完全”

“ 愛” “ 死” “ 欲情”

“ 戦争” “ 拷問” “ 虚実”

と言う意味がある。

構成理由は神を倒す為。

シヌは全員の正体を知っている。

神は、ミレイ・ミクナと協力して制裁者を抹殺しろと命令している。

ゝ拒絶、金、拷問、欲情、戦争ゝ（後書き）

実はキリスト教の

七つの大罪にしようかと思ったのですが……

キリスト教ばかり入れるのは変なので、独自の物に……

0 章：表　く偽神の力く（前書き）

最初はファントム目線ですが、途中から第三者目線です。

0 章：表　　く偽神の力く

シヌが引き起こした事件から1年経った……

半年前からあのカザリというチャラ男とは、慰安旅行以来会ってはいない。

戯言を言いに来た……？

そう言ってしまうばそう思いたい。

これ以上事件はゴメンだ……

クラッド6

リトルウイング

居住区　ファントム自室

正午

俺は部屋で、昼食の自作クリームスパゲティを食べていた。
マリ、エミリア、ナギサも居る。

エミリアとナギサは俺に対して相変わらずだが……

半年前からマリの態度が少し変わった……

具体的に言うと、干渉が激しくなったのだ。

これまでは、少し干渉したとしても本音を聞こうとする事は無かった。

本音など読心術を使えばわかりそうだが……

現在、出来るだけ口から言わせようとする。

聞く事は決まって……

カザリとロストの事だ……

いつの間にか心を読まれていたらしい。

「アタシを除け者にするな！」

「頼れ！ 1人で背負うな！」

わかってる……

除け者にするつもりはないし、頼りたい……

……

だが……

危険に晒したくはない……

勿論マリだけではない、仲間もそうだし、他人もそうだ。

考え事が最後になると、毎回マリに言われる事がある……

マリ

「自己犠牲は許さないよ」

エミリアとナギサの前で初めて言った。

マリの言葉にキョトンとする2人。

エミ

「どうしたの？」

ナギ

「ファントムの事か？」

マリ

「何でもないよ♪

ファントムの料理美味しい！」

ファ

「……ありがとう」

少し変わってしまったが、不快感があるわけではない。
その内、元通りになるだろう……

ニューデイズ

ガーディアンズ設立

ケイリヨン刑務所

地球で言う、中国の様な名前が多い地域の森に、この刑務所はある。

森を囲む都市の名前は

“都市リクヨ”

金持ちしか住まない都市。

しかし、犯罪発生率が高い。

何故なら違法カジノやヤクザの事務所、非公式な地下都市……

光あるところに闇、とはこの事だろう。

それを牽制、犯罪率低下を理由に刑務所を設立している。

ケイリヨン刑務所があるケイリヨンの森は、凶暴な原生生物に入り

組んだ道……

刑務所には特定の道でしか辿り着けず、外に出る場合もそうなる。

何も知らない受刑者が森を抜けようとしても……

原生生物に跡形も無く食われる。

or

森に迷い、絶望後に自殺。

どちらかだろう。

異常な場所に置かれてるケイリヨン刑務所に入所するのは、言うまでもなく、凶悪な犯罪者。
ほんの一握りだけが出所出来るが、大半は刑務所で人生の幕を閉じる。

そんな刑務所がある森の上空を、今では見かけないヘリが飛んでいる。

搭乗者は

Twelve punisherの5人だ。

ロドリゴが操縦している。

ロド

「狩りを楽しんでこいよ！

ガハハハハ！！」

アン

「馬鹿笑いするな

老いぼれ」

ゴー

「アンナ、金をやるからその喋り方止めろ」

シェリー

「刑務所って言ったら

AVの種類であるよね」

カザ

「自由人っすね」

確認しますが、目的は

“王権”の奪還。

狩りは邪魔する“ゴミ”だけっすよ。

……………

カザリ、いきまゝす！」

カザリは一番に飛び降りた。

アン

「酷いパクリだな

口を縫うぞ、チャラ茶髪」

次にアンナが飛び降りた。

シェリー

「“ゴミ”駆除とS＊Xは同じ位たのしいってね」

シェリーも飛び降りる。

ゴー

「変わらないな……」

ロド

「変わらんさ。」

時代は変わったがの」

ゴー

「そうだな大佐。」

……帰ったら小遣いやるよ、お爺大佐」

最後にゴールドも飛び降りた。

全員、パラシュートなど着けていなかった。

ロド

「だゝれがお爺じゃ！
ガハハハハ！！」

ヘリを旋回させ、森の開けた場所に着陸した。

ケイリヨン刑務所
入口前

4人はコンクリートの地面に着地したが、骨折はおろか外傷も無い。

カザ

「さっさと“王権”を連れ帰ろう。
長居は無用っす。

……………

と、言いたいですが……………」

4人の前に

黒いゴコウバオリを着て、キセルを吸い、自身と同じ名の剣を持つ
男が立ち塞がった。

ルシ

「待ってたぞ。」

カザリ・イリオン」

キセルを吸い、煙を吐き出すルシフェル。

アン

「アンタの知り合いかい？」

カザ

「そうですよ。」

……ルシフェル……

それでわかるっすね？」

シェリー

「へえ……」

ファントムさんのお兄さんね」

ゴー

「私達のファントムに兄弟などいない」

カザ

「そうっすね。」

ファントム様に兄弟はいない。

.....

……ここは僕ちんが止めます。
アンタ達は“王権”を……」

アン

「指図するな チャラ男。
不本意だが私も加わろう」

ゴー

「では私とシェリーで探そう。
行くぞ」

シェリー

「アイアイさ〜」

ルシ

「まあ待てよ……！」

セイバーを、後ろを通ろうとした2人へ振った。
フォトンの衝撃刃が飛んでいき、回避行動をさせた。

衝撃刃は刑務所の壁に当たり、巨大な裂け目が出来た。

ゴールドとシェリーはカザリ達の場所へ行く。

シェリー

「やってくれんじゃん」

ゴー

「堕メ野郎の名だけはあるな」

カザ

「名は転生に必要な要素ですもんネ」

堕メ野郎は人間じゃないけど、影響はあるみたいっすね」

アン

「どうでも良いけど……」

アンタ、中の奴らの心配は無しなんだね。

人間は同族を庇うんだろ？」

アンナは衝撃刃が作った裂け目を指差して言った。

ルシ

「さっき俺は……」

“待ってたぞ”

と、行ったぞ」

カザ

「既に避難済みですかい？」

ルシ

「そうだ……」

ガーディアンズと協力してお前を見つけたんだ。
迎え討つ準備は出来ているし、もう1人の仲間も取り押さえられて
るだろう」

ケイリヨンの森
開けた土地

ヘリを囲む様に、ガーディアンズが取り囲む。
中には、ルシフェルに協力する数名のローグスがいる。
部隊長はバアルだ。

バア
「船を降りて大人しく投降しろ！」

ロド

「ガキ共が……」

ここで危険なのは部隊長みたいなのとタイラーかの……」

ローグスはタイラー、ヴィヴィアン、リリス、ロスト、がいる。

ケイリヨン 刑務所

カザ

「なめられてるな……」

僕ちん1人じゃ無理だけど、4人も相手取れないでしょ？」

ルシフェルはキセルを消し、ナノトランサーに仕舞った。

ルシ

「雑魚4匹……
簡単に釣り上げれる」

アン

「言うじゃん!!
白髪野郎!!!!」

クイーンヴィエラを、数十本一気に打ち出す。

ルシフェルは衝撃刃で全て落とす。

しかしアンナに後ろを取られ、
刃鞭パラディソを振られる。

そんな事をさせる前に、前を向いたままアンナを蹴った。
壁に激突する。

アン

「ガハッ!」

ゴー

「頭に血が昇り過ぎだな。

………

しょうがない……

私が回復に向かう」

アン

「必要ない！！

こんな屈辱……

ファントム様に陵辱された以来だ！！」

ルシ

「ファントムはそんな悪い奴じゃない」

アン

「今のファントムじゃない！！

何も知らない“ゴミ”が……

“鉄の処女”

アイアンメイデン！！」

ルシフェルの真後ろに魔方陣が現れる。

(ルシ)

！？ 何だ！？

危険を察し、避けようとしたが……
若干遅く、鉄の処女に飲み込まれた。

ガシャン！

扉が仕舞った音……
冷たい鉄の音だ。

直後に聞こえる、
ルシフェルの痛みを堪える声。

ルシ
「グッ！　ウ…グア…！」

アン
「もっと叫ぶかと思ったけど……
大したもんだね」

カザ
「アンナさん！
力は抑えて下さいよ！」

アン
「黙れ！　お前だって銀行強盗の協力者を“拒絶”の力で殺しただ
ろ！」

カザ
「チッ……」

ゴー

「喧嘩は止めろ。

ファントムが見たら、怒られるぞ」

アン

「……わかったよ」

カザ

「……悪かった」

シェリー

「じゃあ仲直り！
握手握手」

無理矢理握手させる。

ゴー

「よし、大佐のところで行こう」

4人が歩き出すと……

バキバキ……

バリッ！！

鉄の処女を無理矢理壊し、出てくるルシフェル。
痛々しい針の傷跡が見える。

キセルをくわえ、セレスティアルブレイズを構える。

シェリー

「アンナさんの“拷問”の力を……
……………」

鉄の処女……

まさに処女喪失……

ゴー

「下らない事を言うな。
これは大問題だ」

カザ

「ですね。

いくら堕メ野郎の名前を持つとしても……
所詮人間……

僕達の力を覆すなんて……」

アン

「ムカつくな……」

ルシフェルは微笑し、
キセルをくわえながら煙をはいた。

ルシ

「言っただろ雑魚共……」

……釣り上げれる位簡単なんだよ。

お前らが何であろうと……雑魚なんだ」

アン

「腹立つねえアンタ……」

……

拷問は無しだ。

殺してやるよ」

ルシ

「せいぜい頑張れ……」

調教してやるよ！」

この日から……

制裁者達との戦いが始まった……

0章：表　く偽神の力く（後書き）

雪降って寒い……

ストーブ使っていないと指先がおかしくなって書けなくなる……

……………

何の話！？

アンナ“拷問”

・鉄の処女

アイアンメイデン

・拷問具

高さ2 m

女性を型どっており、前面には観音開きの扉が付いている。

中には大小様々な針が付いており、致命傷を避ける様に設計されている。

グラールには存在しない。

地球では、

中世のヨーロッパで作られた。

拷問具の中では最も有名だと言ってもいい。

しかし、資料や実物に似せたレプリカによると……

使われた経歴が少なく、復元した物のほとんどは致命傷に刺さる設計になっている。

実用されていたかは、

怪しいところだ。

1章::0 〽使用者〽(前書き)

やっぱり、緊張感が無い書き方だな……

進歩しないと。

1章：0 使者

ニューデイズ

ケイリヨン刑務所

入口の前に十字架が立てられてある。

それに磔にされている……

ルシフェル……

手と足に杭が刺さっている。
まだ息はある。

アン

「ハア…ハア…ハア……

ざまあ見ろ……

“拷問”の私の力は……中々死ねないよ」

十字架はアンナの力で出現させたらしい。

アンナ以外の3人も息を切らし、傷だらけだった。

カザ

「思った通り……
悔れないっすね」

カザリに至っては、腕を斬り落とされている。
片方の腕で落ちた腕を持っている。

ゴー

「攻撃型の力ではない私とシェリーは……
役立たずだったな」

シェリー

「“金”も“欲情”も興味を示さないもんね……」

カザ

「もう良い……」

大佐のところへ行こう」

全員歩き出した。

すると……

ブシャ！

杭から手と足を引き抜き、セイバーで斬りかかる。
瞳孔は開きっぱなしだ。

セイバーはアンナの顔面を捉えた。
顔に突き刺さる。

ルシ
「ハアア！！」

上に振り、鼻から脳天まで真っ二つになる。
よろめきながら、後ろへ距離を取る。

カザ
「まだ動けるんですか？」

ゴー
「他の“ゴミ”とは違うようだな……」

シェリー

「使い回せる粗大ゴミ？」

3人が3人とも、アンナの事など話していない。

ルシ

「仲間の心配は？」

……冷たいな」

“ 4人 ” が笑う。

アン

「アハハ！」

ファントム様以外は信じていないけど、死にかけても心配しないのはわかる」

頭を割られながらも悠然と話す。

ルシ

「……………」

どうなってる……」

アン

「そこまで話す必要は無いわ。

……………」

ここまで奮闘を称して、綺麗な死に方をさせてあげるわ。

“斬首台”ギロチン」

魔方阵からギロチンが出現した。
ルシフェルの首を抑える。

ルシ

「クソ……」

アン

「拷問器具だけじゃないのよ。

It's show time!!」

レバーを蹴って、
刃が振り下ろされた。

ケイリヨンの森
開けた土地

草は血に濡れ、木はへし折れている。

その土地で立っていたのは、ロドリゴとタイラーとバアルだった。
しかしタイラーとバアルは疲弊しきっている。

ロド

「なんじゃ……」

全然弱い」

タイ

「クッ……」

タイラーは手に力を込める。

バア

「ナノブラストはダメですよ。

使っても勝てないだろうし、貴方の体が持ちません」

タイ

「だが……

ロド

「小僧、それは違うぞ」

バア

「何がだ？」

ロド

「兵士たるもの、死ぬと解っていても戦わなきゃならん。
それが出来なければ兵士ではない」

バア

「まるで道具だな」

ロド

「戦争では道具じゃ。

戦場ではそれ以上の価値は作れん」

バア

「貴様……」

ロドリゴは
コマンドブレザー
を取り出した。

ロド

「お主らじゃ相手にならん。死ね」

巨大な刃が向けられ、射出された。

……ガキン！

光テクニック
グランツによって弾かれた。

ロド

「なんじゃ!？」

タイ

「？」

バア

「誰が……」

ロドリゴの前に、フード付きの白いマントを羽織った人物が降り立った。

ケイリヨン 刑務所

ギロチンの刃は、
ルシフェルの首を切り落とさなかった。

フード付きの黒いマントを羽織った人物が、
ルシフェルの拘束を解

い救出したのだ。
ギロチンの横にルシフェルを寝かす。

アン

「誰？ お前……ウツ！」

黒マントは、アンナの首を真っ黒な日本刀で斬った。

返り血を浴びる前に、カザリ達の場所へ蹴飛ばした。
カザリがキャッチするが、腕が一本しかないので器用に足を使う。

ゴー

「傷を負い過ぎてアンナは動けないな」

シェリー

「それより……
アイツ誰？」

フードを被って顔はわからないが、体付きから男だろう。

ルシ

「……誰だ？」

黒マント

「俺を忘れたか？」

あれだけ復讐しようとしたのに」

ルシフェルは声でわかった。

黒マントが誰なのかを。

それはカザリ達も例外ではなかった。

シェリー

「!!!!」

その声……!!!!」

SUVウェポンの

ガトリングシステム

ラファールバースト

を呼び出し、発砲する。

しかし黒マントは、

漆黒のフォトンの壁を作り、銃弾を遮る。

ゴー

「丁度良い!!」

「やっとお前を殺せる」

後ろに回り、

エンドイフで斬りかかる。

それを避け、足で肘を逆に曲げた。

ゴー

「ガッ!」

頭から踵落としを食らわせ、地面にめり込ませた。

シェリーのガトリングが止む頃、漆黒のフォトンの壁を解いた。

カザ

「何故!？」

「何故アンタはグラールにいる!？」

黒マント

「神のお陰だ。」

ちよっと前までは信じてなかったがな」

マントを脱ぎ捨て、姿を現した。

黒い服に黒いコート、

漆黒の髪に目立ちにくいオールバック。

カザ

「シヌ……!!」

ルシ

「……………」

シヌ

「シフフフ……」

アハハハハハハ!!

遂に舞い戻った!!

人間は滅ぼせないが、

お前達を“また”を殺せる!!

それで堕メ野郎の邪魔をし、居なくなるなら……

こんなに嬉しい事は無いぞ!!!!」

(カザ)

分が悪過ぎる……！

いくら僕達が死ななくても、粉々にされる……！！

カザ

「シェリーちゃん！

アンナさんを！」

アンナをシェリーに託し、素早くゴールドを回収した。

シヌ

「せいぜい逃げろ。

ゆっくと追い詰めて

殺してやる」

カザ

「ウゼエ……

シェリーちゃん、大佐のところへ行こう」

シェリー

「……わかった」

ゴールドとアンナを背負い、森に消えていった。

シヌ

「……………」

立てるか？ ルシ……

差し出した手を振り払い、M19を向けた。

ルシ

「何故生きている？」

ファントムはお前を殺したと……

……クッ……」

銃を落とし、地面に倒れてしまった。

シヌ

「手と足に穴開いてるに……

無理するのはファントムと同じだな」

シヌはルシフェルを背負った。

ケイリヨンの森
開けた土地

ロドリゴの刃を的確に落とす白マント。

(ロド)
これ程のテクニック……
フォースの上級者でも
中々いない……
一体何者じゃ？

決着がつかないまま時間が過ぎていく。
すると、カザリ達が走ってきた。

ロド

「……!？」

どうしたんじゃ!？」

カザ

「話はあとつす。

へりを出して下さい!」

ロド

「わ…わかった……」

へりに乗り込み、エンジンを作動させた。

白マントは追撃せずに、へりを見送った。

バア

「君……凄いね……

女の子だろ?」

確かに体付きから女の子だとわかる。

白マント

「ありがとうございます。」

戦闘経験は無かったのですが……」

フードを取る……

白マントの正体……

ミレイ・ミクナ

、その人だった。

バア

「君って……」

タイ

「バカな……」

君は5年前に……」

シヌ

「そう！ 彼女は5年前、お父さんに誤って殺された。

……

つと……

意識があるのは君達だけか……」

ルシフェルを背負って、シヌが現れた。

ミレ

「みなさん危険な状態ですね……
救援が来るまでは私が治療しましょう」

シヌ

「みんな面識が無いのに……
星れ……じゃなくて……」

幻視の巫女様は慈悲深いですね」

ルシフェルを横たわらせる。
他にも倒れているヒト達を、一ヶ所に並ばせた。

1章：0 へ使用者へ（後書き）

タイラーとミレイって……

面識無いですよ？

ユニバースを詳しく知らないのです……

1章：1　く求めていたのは仲間く（前書き）

後半が強引ですが、

カレンは聞き分けが良いんですよ……

……たぶん……

1章：1　く求めていたのは仲間く

ロドリゴ私物へり内

ロド

「なっ……」

……

……

クソがあああああああああああ！！」

シヌが現れた事に激しく激怒する。

アン

「ごんがいは毒づがない。

わだじも同じぎぶんだがらね」

喉を斬られて、何を言ってるかわからない。
それに加え、頭を割られているのだから。

カザ

「無理しない方が良いつすよ。
死ななくても、痛みはある程度感じるんですから」

アン

「わがっでるわよ」

シェリー

「それよりどうするの？
アイツがいたら制裁は
無理じゃない？」

ゴー

「ファントムか“虚実”……
どっちかがいたら、どうにかなるかもな……」

制裁者達は圧倒的な敗北をし……
帰路についた……

ニューデイズ

都市リシヨ 病院
待合ホール

ファントムが現れ、ソファーに座っているバアルに近づく。

バア

「ファントム君……」

ファ

「兄貴は!?!」

バア

「704号室だよ。」

まだ……

ファントムは最後まで聞かずにエレベーターに向かった。

バア

「……最後まで聞こうよ。」

……

まあ……兄弟だからか……

心配しなかったらおかしい……」

レディ

「私もお兄ちゃんが心配だよ」

売店で買い物をしていたレディが、バアルの元に戻る。
隣に座ると、缶コーヒーを渡した。

レディ

「お兄ちゃんも銃創が多かったんだから……
安静にしていなと」

バア

「まだ余裕さ。」

それよりも……」

レディ

「？」

(バア)

何故、幻視の巫女が？

それにシヌという奴……

僕やタイラーさん達が手を焼いた奴らを

4人も倒すとは……

何者なんだ……？

………

ガーディアンズも関わった事だし……
僕も動かないと……

ルシフェル病室
704号室

病室の中には
ヴィヴィアン
タイラー
リリス
ロスト
が居た。
そしてもう1人……

ファ

「!?!?!」

何故シヌがいるんだ!?!」

シヌ

「しー

病院では静かに」

ファ

「貴様！」

リリ

「待って下さい！」

シヌはルシフェルを助けてくれたんです！」

ファ

「な！？」

意外な事実に驚愕する。

狂神の信念時のマガハラで同情したと言っても、シヌを信じているわけではない。

ファ

「ロスト、本当か？」

ロス

「……ああ。

間違いない」

シヌ

「残念だったな」

ファ

「チッ……」

何故生きている？」

シヌ

「まだ話す必要は無い。

今はルシフェルの近くにいるんだな」

シヌはファントムの横を通ると……

シヌ

「（後で屋上へ来い）」

そう言い残し、去ってしまった。

ファ

「……………」

兄貴はどんな状態だ？」

リリ

「……………」

タイ

「意識不明だ……」

死にはしないが、当分は目覚めないだろう……」

ヴィ

「手と足に重傷を負って……」

血液量が足りてない状態なんです……」

かなり元気が無い

ヴィヴィアン。

5年近くも相棒なのだから当然だろう。

ファ

「一体誰が……」

マリ

「お兄さんは!？」

船を停めに行っていた

マリが、病室に入ってきた。

ファントムを先に降ろし、自分は船を停めていたのだ。

リリ

「ルシフェルは大丈夫よ……
大声出さなくても良いわ」

リリスは落ち着いている。

ルシフェルの心配はしているが、ヴィヴィアンとは少し違う見方なのだろう。

ヴィヴィアンは心配し過ぎ。

リリスは信頼し過ぎなのだろう。

ファ

「……………」

ファントムは場を見計らい、病室をあとにした。

病院 屋上

ファントムは屋上についた。

シヌは手すりによしかかり、景色を眺めている。
夕日が輝いていた。

シヌ

「君はタイラー君とヴィヴィアンちゃんに、俺の事を話したんだな。
会った事は無いから
初めましてだったけど」

ファ

「嫌な目で見られただろ？
貴様のした事は全て話している」

シヌ

「嫌な目しかされなかった……」

「どうやら俺の信念は、君しか知らないみたいだな。」

……………

……同情は避ける。

「これからの戦いは特にな」

ファ

「貴様に指図される覚えはない。
それより、何故呼んだ？」

シヌ

「聞きたい事位あるだろう？
君は主人公だ。
知っておく事はある」

少し前と何も変わっていない様に見える……

しかしファントムは、
違いを感じ取ったのか、信じる事にした。

ファ

「何故生きている？」

シヌ

「神だ。
奴が直接、俺に罰を与えた。
生き返って制裁者達を抹殺しろと」

ファ

「制裁者達？」

シヌ

「通称

t w e l v e p u n i s h e r
カザリって奴はそのメンバー……
簡単に言うとは

“転生者”だ」

ファ

「転生者？」

てか、そのメンバーって俺やエミリア達も……

シヌ

「それは自分で調べろ。

神はそう望んでいる。

……………

言えるなら……

君やエミリアちゃん、ナギサちゃん、シズル君はまだ抹殺対象じゃないって事だ」

ファ

「話せる事と話せない事があるのかよ……
制裁者達の目的は？」

シヌ

「人間への制裁。

俺と似た様な事をするつもりだ」

ファ

「……そりゃ凄い。

さっさと潰さないとは」

シヌ

「言っておくが、奴らは1人1人が強い。
一気に相手にしたとしても2人が限界。
ルシフェルは4人相手であの様だ」

ファ

「大丈夫だ。
俺には……」

シヌ

「コクイントウで作った刀があるから余裕？
だが体を酷く酷使用する」

ファ

「!?!? 何故知って……
」

シヌはファントムの額に触れた。

ファントムの脳に

星霊祭の記憶が流れ込む。

シヌ

「君はこの祭で刀を使った。
無かった事にされた後は1度も使っていない」

ファ

「ロストの話は本当だったな……」

シヌ

「……………」

制裁者達はまだ5人しか集まっていない。

君達を抜かして最大7人。

傷が癒えるまでは仲間探しはしないはずだ、いつでも戦える準備はしておくんだ」

ファントムを置いて、

屋上から立ち去ろうとする。

ファ

「どこへ行くんだ？」

シヌ

「俺と一緒に星れ……」

じゃなくて、ミレイが生き返った。

神は2人1組でいろって」

ファ

「なら亜空間能力を使えば良いだろ」

シヌ

「神が少し前の俺を

そのまま復活させると思うか？」

亜空間能力で使えるのは

- ・ 他人の治癒
- ・ 黒餓を取り出す時
- ・ Aフォトンを生み出す時

それと昔みたいに

Aフォトンは纏えない。

自分を亜空間で治せないからな。

不老不死も取り上げられた。

……………

使えると言ったら……

- ・ 神病の身体能力の強化
- ・ Aフォトンを纏わず使用
- ・ 亜空間から黒餓を取り出す

今回は俺で倒せるLVだったが……

君か“虚実”……

どちらかが制裁者の戦力になれば……

……………

俺達は負ける」

シヌは立ち去った。

ファ

「……俺“達”……
……すっかり仲間だな」

ファントムは微笑むと、手すりに寄りかかった。

ニューデイズ
オウトク山
グラール教団

教団員でも中々通らない通路の端に、カレンがいた。
ガーディアンズ制服を着ている。

カレ

「……………」

「一体誰なんだ？」

手に持っている手紙を見る。

どうやら誰かに呼ばれたようだ。

？

「カレン……」

カレ

「!？」

誰もいないはずの後ろから声をかけられ、武器を構えて後ろを見た。

そこには白マントを着た人物がいた。

？

「わわわ！」

待ってカレン！」

カレ

「……!……」

その声……」

フードを脱ぐ。
正体はミレイだった。

カレ

「ミレイ……」

ミレ

「久しぶりね……
5年振りかし……
……！……」

何故生きているか？
何故今になって？

そんな事を一切聞かずに、ミレイに抱きつくカレン。

カレ

「会いたかった……
本当に……
会いたかった……」

ミレ

「カレン……」

……

……

すみませんカレン。

あまり長く一緒にはいられません……」

カレ

「……え……？」

ミレ

「私は死にましたが、
ある理由で生き返りました」

カレ

「どういう事なんだ？」

シヌ

「ここに居たのか。

ミレイ、神は離れるなって言っただろ」

いつの間にかシヌが居た。

ミレイを探していたようだ。

ミレ

「すみません」

シヌ

「いや、謝らなくて良い。

気持ちかわからないわけではない」

ミレ

「ありがとうございます」

カレ

「彼は？」

ミレ

「シヌです。

私達の助けになってくれます」

カレ

「シヌ……

……

まさか、ファントムの言っていた……」

ムサシジサシを構える。

シヌ

「嫌だなあ全く」

シヌも臨戦体制を整える。

しかしミレイが割って入った。

ミレ

「シヌさん、弁解と言うのを知って下さい。

カレン、ファントムさんから聞いたシヌさんの印象は良いものではないと思います……

しかし、今は仲間です」

カレ

「……………」

わかった……」

カレンがムサシジサシを仕舞うと、シヌも警戒を解いた。

ミレ

「いいですか？

詳しい事は話せませんが、私とシヌさんはある意思によって生き返りました。

……………」

目的は……

グラールを守る為」

カレ

「!」

ミレ

「グラールを守るには、私とシヌさんだけでは不可能なんです。……お願いします。力を貸して下さい」

カレ

「……………」

……………」

双子なのに水くさいな。協力するに決まってる。グラールの為でもあるしな」

ミレ

「カレン……」

カレ

「で……私はどうしたら良いんだ?」

ミレ

「はい。」

1週間後……

ここオウトク山に事情を知った関係者が訪れます。私も顔を出します。

それまで私の事を話さないで待っていて下さい」

カレ

「それだけか?」

シヌ

「ガッカリか？」

アイツらと戦わないだけマシだと思うけど。

……………

俺は下の町に泊まっているぞ。

君達は、仲良く同じ部屋で寝たら良い。

ああ…それと、仲良い奴にも無闇にミレイの事は話すなよ」

立ち去ろうとするが……

カレ

「待ってくれ。」

今気を使ってくれたな？

なら私も気を使おう。

私がここに泊まれるように手配する」

シヌ

「……………」

そうか、お言葉に甘えよう」

カレンが手を差し出す。

シヌ
「？」

カレ
「挨拶がまだだったな。
カレン・ミクナだ」

シヌ
「知ってるけどな……
……」

握手をしない……

シヌ
「ゼロ・ブラック・シヌだ。
よろしく」

何故か握手せずに去ってしまった。

カレ
「？」

ミレ

「ごめんなさい……シヌさんに悪気は無いんですが……

……

私達に触れる事を怯えています」

カレ

「?..?」

ミレ

「私達のような、フォトンに敏感なヒトにわかってしまうんです。彼の心が……」

カレ

「心……?」

ミレ

「生き返った時に一度触れたのですが……

……常人には耐えられない闇を感じました……

それを知られて、仲間が去っていくのが嫌なんでしょう……

……

……

彼にとって……

やっと出来た仲間なんです」

1章：1　く求めていたのは仲間く（後書き）

シヌはまだ、人類滅亡を考えている節がありますが……

神の監視下なので、そんな事は出来ません。

若干諦めたのか、仲間を求める感じがあります。

く神の使者＋12人の制裁者メンバーく（前書き）

t
w
e
l
v
e
p
u
n
i
s
h
e
r
の紹介は、ネタバレが若干あります。

「神の使者＋12人の制裁者メンバー」

ゼロ・ブラック・シヌ

Lv250

性別・男性

年齢・18歳

種族・第1人類

身長・183cm

体重・69kg

タイプ・“絶望”

“嘘”

“狂気”

“信念”

“対価”

“闇”

髪・目立たないオールバック、漆黒

服装・黒い服、黒いコート

所属・神の使者

1年前に起こった、

狂神の信念の首謀者。

ファントムに倒され地獄へ落ちたが、神との交換条件により働いている。

交換条件の内容は……

天界に住まわせる代わりに、生き返って制裁者達を抹殺すること。

現在でも人類滅亡は諦めていないが、神の監視下にいる以上は出来ない。

しかしシヌの考え方が変わってきたのか、諦めかけている。その理由は仲間が一因と思われる。

仲間までいなくても、親近感がわいてきているようだ。

決定的なのはカレンと握手しなかった事だ。

ミレイもそうだが、

フォトンに対して敏感な人物だと、シヌに限って心が見えてしまうらしい。

自分の心を知られて、離れていくのを避ける為に握手はしなかった。

現在はオウトク山のグラール教団に部屋を持っている。

一緒に生き返った協力者のミレイは、基本的に一緒に行動しなければならぬ。

恐らくミレイに、シヌを近くで見張らせる為。

神によってシヌの力の半分は使えない。

使える能力は、

- ・ Aフォトンを纏わず使う
- ・ 亜空間能力による他人の治癒
- ・ 黒餓を取り出す
- ・ 神病の症状の身体能力強化

タイプは制裁者達のような力は所持していないが、シヌを象徴する意味がある。

- ・ “絶望”

ミレイやカレンが感じ取るのはこの感情。

少し前は人間を絶望させるのを良しとしていたが、現在は自ら与える事は無い。

・ “嘘”

制裁者の“虚実”とは少し違う。

虚言癖は自重気味。

・ “狂気”

狂神の信念時に、人間の悪で人類を滅ぼそうとした。

その悪が“狂気”。

・ “信念”

自分の悲劇を生み出さない為に、人類滅亡を“信念”にしている。

・ “対価”

シヌのお礼に関する。

永遠なる信念では明かされなかったが、

制裁者達のある1人に

関係がある。

・ “闇”

亜空間の歪みで生まれるAフォトンを示している。

これは制裁者と似ている。

生き返った為、歳をとり始めている。

神が能力を半分封じているので、

LVが現実的に……

ミレイ・ミクナ

Lv250

性別・女性

年齢・18歳

種族・ニューマン

タイプ・フォース

容姿・SEED事件時と同じ

所属・神の使者

5年前のSEED事件時に、
誤って父親に殺害されている。

幻視の巫女であり、カレンとは双子。

死亡後は天界に送られ、神に星霊になってほしいと頼まれる。

グラール教団が出来た頃から星霊は存在しておらず、信仰によって
生まれた神々（ヤオロズなど）を統括する為に星霊に任命された。

自分を神の1人としては見ておらず、あくまでもヒトして存在したい
ようだ。

しかし生き返った際に神の力が少し残っており、良くは思っていない。

Lvは約250。

年齢は死亡時からになる。

シヌと一緒に生き返った理由は監視の他にも何かあるようだ。

現在はオウトク山のグラール教団で寝泊まりしている。

星霊という事は伏せている。

・神の使者

神が間接的に人類への干渉を行う為の存在。
狂神の信念時のファントムも含まれる。

今回は、優秀な元人間を選抜している。
(シヌ、ミレイ)

目的は堕天使が構成した“12人の制裁者”
(twelve punisher)
の抹殺だが、
そのメンバーである

ファントム

エミリア

ナギサ

シズル

は、今のところ抹殺対象ではないようだ。
しかも、ファントムには協力をしてほしいらしい。

・ t w e l v e p u n i s h e r

メンバー

“ 象徴 ” L v

名前

力の使用方向

？ “ 王権 ” L v ？

支配型

“ 運命 ” L v 2 0 0

ナギサ

運命型

？ “ 食 ” L v ？

攻撃型

“金” LV200

ゴールド・シルバシノ
支配型

“拒絶” LV200

カザリ・イリオン
拒絶型

“完全” LV?

ファントム・レガス
?

“愛” LV200

エミリア・ミューラー
支配型

“死” LV200

シズル・シュウ
運命型

“欲情” LV200

シェリー・エクスタシー
支配型

“戦争” LV230

ロドリゴ・ゼル

攻撃型

“拷問” LV200

アンナ・ザ・ブラッド

召喚型

“虚実” LV?

?

?

戦闘時にどんな戦い方をするかは、話の進行でわかります。

明確になっていないメンバーは、次の機会にします。

「神の使者＋12人の制裁者メンバー」(後書き)

ふと思ったのですが……

今現在、カレンとミレイは歳が違うけど……
これを双子と呼んで良いのか……？

まあ、同じ時に生まれたんだから
双子ですよね(笑)

歳どうこうの話じゃないですもんね。

今の何の話だったんだろう……

1章：2　〈嘘〓真実〉（前書き）

どっちかと言うと、

サブストーリーに近いかな？

1章：2　〈嘘Ⅱ真実〉

都市リンヨ

地下都市　カジノ

きらびやかに見える汚い裏カジノで、ルーレットにヒトが集まっていた。

青年が1つの番号だけに全チップを賭けたのだ。
換金したら1億メセタはくだらないだろう。

1チップⅡ1万メセタ
と、高レート。

ルーレットにおいて、

1つの番号に賭けての配分は32倍。

勝った場合32億メセタと、普通のカジノでは破綻的金額だ。

しかしこの裏カジノでは、問題が無いようだ。

ディーラー

「よろしいですか？」

賭けた青年に問う。

青年

「問題ありません。
早く回しましょう」

その肝が座った態度に、野次馬はざわつく。

ディーラーがルーレットを回す。

ボールが放たれ、だんだんと遅くなっていき……

……

……

……

見事に賭けた番号に当たった。

その瞬間に歓声が響いた。

ディーラーも驚きを隠せない。

……いや、違うところに驚いているようだ。

青年

「どうしました？」

もう一回賭ける前に換金してほしいんですが？」

実はこの青年……

1チップから始めて、連続で1つだけの番号を当てているのだ。

ディーラー

「わかりました……

すぐにご用意致します」

そう言うと、換金所の奥へ消えていった。

ディーラーが居なくなると、野次馬の1人が話しかけてきた。

野次馬

「アンタすげえな！

（なんだい、イカサマしてのかい？）」

耳打ちしてきたが、青年はハッキリと答えた。

青年

「イカサマ？」

……とんでもない。

むしろ、イカサマしてたのはディーラーですよ」

野次馬

「んな事はわかってる。

どうやっ……

青年

「全て“真実”

全て“嘘”

……わかるんですよ。

何となくね……

だからここで止めておくんです」

野次馬

「そうはいかねえ」

カチャ

青年は頭に銃を突きつけられた。

他の野次馬にも。

青年

「そういえば、お客さんの数が減りましたね。貴方達が出ていかせたのですか？

ここを取り仕切るチューザレファミリーですよ？」

チュ構成員

「頭が良いなあ。

俺達のイカサマが通じないわけだ。

……で？ どうやってイカサマしたんだ？」

青年

「言ったでしょう？

何となくわかるって」

チュ構成員

「そうやってヒトは嘘をつく。

俺はそういうのが嫌いだね……」

青年

「その通り、“嘘”です。

しかし貴方に“人間”の何がわかるんです？

貴方も所詮“人間”という“ゴミ”でしょう？」

構成員がスタンモードをOFFにした。

チュ構成員

「10秒以内に答えろ。

1……2……

青年

「だいたい貴方達の存在意義は何ですか？」

3……4……

青年

「結局愚かしい事をしただけで死ぬ存在」

5……6……

青年

「なら僕が存在意義を与えましょう」

7……8……

青年

「貴方達に存在意義は元々無い。

死ねよ……

クソゴミクス野郎共」

9……10……！」

銃の引き金が引かれた。

しかし……

鉛弾が発射されない。
全員がだ。

チュ構成員

「!？」

青年

「全員の銃に弾を入れ忘れた。
それが“真実”です」

両手の袖から鉄扇を取り出して、構成員達の喉を斬った。

血飛沫を鉄扇で受け止める。

青年

「汚い血をかけないで下さい。
どこまで行っても使えない存在だ」

シュッ！

と、血を飛ばし……

生き残りの構成員を探しに向かった。

警備室を制圧。

事務室を制圧。

個室を制圧。

最後に換金所へ行く。

扉を開けて、隠れているヒトを殺していく。
容赦など全く無い。

ある程度始末し終わると、1人だけ生き残りを作る。

構成員

「ヒィ！ 助けて！」

青年

「うるさいですよ。」

「ここ、開けて下さい」

金庫の前に連れて行って開けさせた。
中には大量の現金があった。

青年

「32億メセタ。
早めに」

構成員

「は…はい…」

アタッシュケース32個にメセタを詰め終わる。

青年

「長かったですね。
でも助かりました。

t w e l v e p u n i s h e r には資金が必要なんで……
……………

“お礼”として、半分は貴方にあげます。
16個でも重いんですけど」

ケースの大半をトランサーに仕舞い、残りはキャスターを使って運ぶ青年。

ヒトを殺した事を何とも思っていない……

それほど……

すがすがしい顔だった。

♪

ハル

「ハッイ！」

グラールチャンネル5。

ニュースキャスターのハルです！

今日のニュースを

ピックアップ！」

ハル

「ニューデイズ

都市リシヨで昨夜発生した、裏カジノ襲撃事件。

その新情報が入りました。

生存者のチューザレファミリーの構成員に事情聴取していたところ
……

構成員の方は支離滅裂な事を口走りながら、舌を噛み切ったとの事です。

一命は取り止めたものの精神に異常があるとの事で、今日未明に精神病院に移送された模様です。

手がかりが生存者だけだったとあって、1からやり直しになりそうです。

……尚、裏カジノを経営していたチューザレファミリーのボス……
キログマ・チューザレは、監視カメラの映像の公開を頑なに拒んでおり、ガーディアンズは情報公開を申し込み中との事です。

また、カジノから消えた総額16億メセタの行方と同時に、カジノ自体に異常な違法性があったとして、証拠が集まり次第に強制捜査を始めるとの事です。

この事件に対して、早くも懸賞金をかけるとの事です。
有力な情報がある方はガーディアンズにご一報下さい」

楕円形のテーブルに座っている制裁者達。

カザリは片腕が無くなっており、アンナは頭と首に包帯を巻いている。

中央の3Dテレビで流れているニュースを見終わると、電源を消した。

カザ

「チューザレファミリーの口止めも危ういっすね〜。
強制捜査なんて……」

ゴー

「私が金を払ったんだ。

……それと、心配は要らない。

既に証拠の監視カメラの映像は引き取った」

ロド

「“ゴミ”の中でも

“ゴミ”な輩じゃ……

口止めで400万。

映像はどれ位じゃ？」

ゴールドは手の指を10本立てた。

シェリー

「10メセタ？」

アンナがプラカードを出す。
喋れないからだ。

(アン)

そんなわけないでしょ。

1000万メセタよ。

頭使いなさい、

やり○ん野郎。

シェリー

「1000万!？」

大層な額だね」

カザ

「良いんじゃないの？」

16億になって返ってくる」

ロド

「それはどうかの……

“虚実”の事じゃ。

我々 twelve punisherの中でもひねくれ者……
うやむやにするかもしれんぞ？

………

それに……

元はシヌの仲間じゃ。

最後に我々についたが、逆も無いわけでは無い」

カザ

「……………」

ともあれ。

こっちの仲間になれば戦力になるし、“食”も復活できる、僕ちん
やアンナさんの怪我も治せるでしょう。

……………」

早く見つけよう」

いつになく真剣な顔をするカザリ。

他の4人も真剣な顔し、
イスから立ち上がった。

1章::2 〈嘘Ⅱ真実〉(後書き)

青年

Lv?

性別・男性

年齢・20歳

種族・ヒューマン

身長・178cm

体重・66kg

タイプ・“虚実”

運命型

召喚型

髪・後ろのトゲトゲが

目立ちにくい髪型

灰色

服装・イロハフブキ、黒

所属・twelve punisher

“虚実”を象徴する青年。

ヒトを殺す事に容赦無用かつ、何とも思わない。

カジノで手に入れた大金は、制裁者達の為に使うつもりのようなのだ。
しかし元はシヌの仲間だったようで、ひねくれ者のようだ。

“虚実”の力は、

制裁者達の中でも異質でありファントム（制裁者）と同等に近い。
“虚実”は嘘だけではなく、真実までも司る。

・運命型

事実を根本的にねじ曲げれる。
構成員の銃は元から鉛玉が入っていたが、入れ忘れたという
真実を作った。

しかし制限が存在している。
目に見えていない場所でしか影響を及ぼせない。
他の存在に影響を及ぼせない。

・召喚型

嘘を作り出す能力。
非常に強力な能力ではあるが、制限がある。
他の存在に影響を与えられない。
元々存在しないもの
（天界と地獄の存在も含まれる）
は作り出せない。

武器として使う鉄扇は、愛用品。

彼岸島っぽい？

若干意識してます。

雅好きっす。

1章：終　　く招待状　く（前書き）

後日談って雰囲気です。

セリフ多め。

1章：終（招待状）

ケイリヨン刑務所襲撃事件から4日後……

クラッド6

リトルウイング

居住区 ファントム自室

ファ

「昨日の事件か……

……

ハア……

嫌な事思い出した……」

実は昨日……

マリと酷い喧嘩をしてしまった。

兄貴が入院した日から質問攻めにされて、ついカッとなってしまう……

今は兄貴の居る病院だ。

マリだけではない。

ロスト、リリース、タイラー、ヴィヴィアン、バル……
あの場に居た知り合いに、かなり不審がられている。

シヌの事を話したのは間違いだった。

ファ

「ハア……」

………

そういえば、オウトク山に行くのは3日後……

マリも呼ばれてるのか……

どうにか仲直りしないと……」

俺はビジフォンの記録機能に、仲直りの言葉を考えて書き始めた。

リトルウイング
カフェ

姉弟揃ったミカとワイナールが、仕事の話をしながら優雅に紅茶を飲んでいる。
いつもの服装だ。

ミカ

「この前の研究は進みました？」

ワイ

「うーん……これが難しくてね……シズル君がガーディアンズから貰ったシールドライン……あれ作ったりゼンって言うヒトは、刑務所に入ってるから進まないんだよね」

ミカ

「では、私の課題が終わり次第に手伝いましょう」

ワイ

「ありがとう。」

姉さんがいれば百人力だよ」

シヌ

「姉弟で午後のティータイム。
幸せそうだな」

ミカ「!？」

ワイ「!？」

気配を消して、シヌが近くに座っていた。

ミカ

「シヌ!？」

何故……!？」

シヌ

「そんな事は別に良い」

ワイ

「君は死んだと……」

シヌ

「死んだ。」

……だから？

些細な事だ。

……

俺がここに居られるのには制限時間がある。
話を済ませよう」

ワイ

「君の話？」

聞きたくないね」

シヌ

「面倒くさいな……」

じゃあ一方的に話す。

3日後にオウトク山に来てくれ。

君達がグラールを救いたいなら」

背中を向けて歩き出す。

ミカ

「どういう事です？」

ワイ

「僕が思うに、君がグラールを滅ぼしそうなんだけど」

シヌは背中をみせながら……

シヌ

「聞く気はあるか？」

と聞いた。

ワイ

「……ある」

ミカ

「正直、心を許せませんが……
グラールに関してなら……」

シヌ

「そう言ってくれると思った」

都市リンヨ

ルシフェルが入院している病院

704号室

病室内ではリリス、ヴィヴィアン、マリが居た。
ルシフェルはまだ意識不明だ。

マリは頭を壁に押し付けながら、項垂れている。

マリ

「ハァ〜……」

ファントムと同じ様なため息だ。

リリ

「早く仲直りすれば良いじゃない」

マリ

「仲直りしたいけど……」

リリスさんはムカつきませんか？」

リリ

「副隊長だけじゃないわよ」

マリ

「？」

リリ

「ヴィヴィアンさんにロストさんを観察してもらったら……」

ヴィ

「恐らく何か知っている雰囲気です。」

ルシフェルさんも、少し前と変わったところがあります」

マリ

「……男って……」

Gコロニー

ガーディアンズ

総裁室

総裁室にバアルとライア総裁、カーツ司令官、タイラーが集まっていた。

バア

「全員に届きましたか」

バアル達が手紙を、目の前に掲げる。

ライ

「オウトク山……」

しかもこの面子……」

カー

「昔みたいだな」

タイ

「5年前か……」

懐かしいものだ」

バア

「……しかも送り手が、ミレイ・ミクナ。
ただ事じゃないですね」

手紙を仕舞う。

バ
ア

「納得できる話を期待しましょう」

1章：終　　ゝ招待状ゝ（後書き）

なんか、

中途半端な感じですね。

2章：0 ～ペテン師～

ニューデイズ

オウトク山

グラール教団

この日……

ミレイとシヌによって集められたヒト達は、会議室に集められていた。

マリ

リリス

ロスト

ヴィヴィアン

バアル

カレン

ライア

カーツ

タイラー

ミカ

ワイナール

何故かミカとワイナールがいる……
そしてファントムは別室……

会議室

円形のテーブルに座敷式と日本的雰囲気であり、会議室とは少し違う感じた。

ミカとワイナールに会った事のないヒトが集まって、珍しいものを見る目で話している。

バア

「ルシフェルから話は聞いてます。
僕はバアル・セレンサーです」

ライ

「ミカが亜空間事件を……
ワイナールが欠片事件を解決したんだったな？」

ヴィ

「凄いですよね！
お会いできて嬉しいです」

タイ

「ヴィヴィアンもそれと同等の事をしただろう」

かつて起こった事件の解決者であり、現代に生き返った存在……
それで称えられた事は無いので、おどおどしてしまふ。

カレ

「……………」

カー

「君は何か知っているようだな」

カレ

「何の話だ？」

カー

「落ち着き過ぎだ。」

君の双子の妹からの手紙だ。

3日前に届いて知っていたとしても、落ち着いていられないはずだ。
3日前よりも前会っていたのが自然な考え方になる」

カレ

「……………」

まあそれは、皆気づいているだろうな。

……………」

……1週間前から会っている。

未だに詳しい話は聞いていないがな……」

ミレ

「皆さん、お待たせしました」

襖を開け、ミレイが姿を現した。

会議室とは違う部屋

部屋にあるモニターが会議室を映している。

シヌ

「「ここで見ていてくれ」

そう言い残して出ていったシヌ。
ファントムは不審に思ったが、昔とは違うのはわかっているので、指示に従う事にした。

ファ

「何で俺だけ……」

不服に思いながらも、
会議室の様子を見始めた。

会議室

ミレイも姿を現したが、シヌも後ろについていた。

マリ

「…………シヌ…………」

ライ

「アイツがシヌ？」

まだ子供じゃないか」

カー

「あんな子供が人類滅亡を企てるとは…………」

シヌ

「やあやあ！

俺にアツサリと仮死状態にされたグラールの代表達。

さっさと修行編でもやって強くなったらど…………痛…………！」

シヌの足を思いっきり踏むミレイ。

ミレ

「少し黙ってて下さい…………！」

シヌ

「わかりました…………」

座布団に座り、揃ったヒトを確認する。

ミレ

「揃いましたね。
ではまず……」

マリ

「あの……！」

話を始める前にマリが声をかけた。

マリ

「ファントムは……
来ないんですか？」

心配している声だ。

(ファ)

「やっぱり可愛いな……」

ミレ

「彼は私の命で動いています。
彼に話はしてあるのでご心配なく」

マリ

「そう…ですか…」

(ファ)

「ミレイ君、嘘をつくなよ」

ミレ

「話を戻しますね。

………

単刀直入に言います。

今グラールに……

危機が迫っています」

(ファ)

「いきなりRPGになったな……
いや、ロケットランチャーの方じゃなくて」

ミレ

「私はシヌさんの力によって生き返りました。

彼に聞いてわかったのですが、彼は1年前の事件で何とか生き残りグラールに戻ったそうです……

ファントムさんに見つかからないように過ごしていたところ、グラールを滅ぼそうとする組織を発見し、壊滅の為に私を生き返らせました」

カー

「わからんな。

シヌと言う男はグラールを滅ぼそうしたんじゃないのか？」

シヌ

「俺以外にやらせるわけないだろ。

考えろポンコツロボ

……痛！」

右斜めにいたシヌに、
座布団を飛ばす。

ミレ

「その組織の正体……

……

それは旧文明人。

旧文明人の意識をその場で引き剥がすには、私の力が効果的だそう
です。

……彼らの目的は旧文明の復活。

2年前に、カムハーンと言う人物がしようとした事を行う気です。
私はそれを許すわけにはいきません。
貴方達もそのはずです」

タイ

「愚問だな。

ここに居る全員が許さない」

ミレ

「はい……

そこで、旧文明回帰を阻止する為に組織を探してほしいのです」

ライ

「なるほど。

アタシ達位の地位なら、探すのは効率的だな」

ミレ

「それだけでは有りません。

組織の人員の中には私達に関わった人物もいるのです」

カー

「もしや、

ロドリゴ・ゼル大佐と

シェリー・エクスタシー少尉も？」

ライ

「誰だい？」

カー

「同盟軍に所属している兵士なんだが、少し前から連絡が取れない

んだ」

タイ

「ローグスにも1人いる。

資金援助をしてくれていた

ゴールド・シルバシノ

彼も数週間前から行方不明……

というか、ケイリヨンの森で見たぞ」

ライ

「私は……

……………

そういえば、ガーディアンズから推薦されていた学生がいたな……

名前は

カザリ・イリオン

だったな」

ミレ

「皆さん心当たりがありますが、他にも関わった人物がいます。

彼らを救う為にも力を貸して下さい」

全員が頷く。

誰も否定していない。

ミレ

「ありがとうございます。」

組織の詳細はシヌさんがお教えします。
すみませんが、私はこれで……」

座布団から立ち上がり、会議室を後にした。

別室

モニターを見ている
ファントム。

ファ

「旧文明人……？」

その組織のメンバーに乗り移っている……
エミリア達はまだ大丈夫なのか？

………

待てよ、俺はどうなる？

俺は旧文明人だろ」

ミレ

「お待たせしました」

後ろの襖から、ミレイが出てきた。

会議室

話し手が変わり、シヌが組織について話す。

シヌ

「てことで、俺から説明させてもらう。
組織の名は

e i g h t p u n i s h e r

8人の制裁者だ。

その名通り8人で構成されあり1人1人がLv200、またはそれ以上。

バアル君とタイラー君が戦ったのはLv230のロドリゴだ。

個人的に戦っても死ぬだけだから、見つけたらミレイか俺に連絡しろ」

リリ

「シヌ、彼らが旧文明人なら貴方は知っているでしょう？」

ロス

「俺達は聞いた事が無いぞ」

シヌ

「公にはされていないカムハーンの部下だ。

俺よりかはミカとワイナールの方が知っている。

俺はカムハーンの政治や組織体制には口出ししなかったからな」

ミカ

「乗り移っている旧文明人は、その体の人物と同じ名前をしていますね……」

ワイ

「彼らってカムハーンに忠誠を誓っていたから、カムハーンと同じ事をしていても不思議じゃないね」

カレ

「……………」

ヴィ

「……？」

シヌ

「まあ、束になって戦えば倒せるかもな。

話せる相手がいるなら話して、協力してもらえ。

……あとは……

メンバーの名前か？

メモしろよ。

カザリ・イリオン

ゴールド・シルバシノ

シェリー・エクスタシー

アンナ、本名不詳だ。

胃呪魔・豪飢

(イズマ・ゴウキ)

アルベルト・キツシャー

リゼン・シュレイド」

バア

「！！ リゼン！？

アイツもなのか！？」

シヌ

「まだ乗っ取られていなかったから、

戦力確保の為にケイリヨン刑務所に入っていたリゼンを、奴らは拉致しようと考えた。

もっとも、君達が囚人を移動させたお陰で何ともなかったがな」

立ち上がるシヌ。

シヌ

「怪我したら俺が治してやる。

今日は深入りせずにこれで解散。

気が向いた時で良いから、手伝ってくれ……

じゃあな」

ミレイと同じ様に会議室を出ていった。

別室

ファントムとミレイが居る別室に、シヌも到着する。

ファ

「……あの話……」

シヌ

「気づいたか？」

全部、嘘だ」

ミレ

「無闇に神の事は話せません。

この次元のバランスが崩れて、元々無かった事になります。

カレンには神ではなく、星霊によって生き返ったと言いました。

カレンの雰囲気グイグイアッさんに疑われた感じがありますが、問題無いでしょう」

ファ

「……………」

本当は俺とエミリア達合わせて12人だな？

奴らの正体は何なんだ？」

シヌ

「行っただろ。

それは自分で知るんだ」

ファ

「何故？」

シヌ

「知るか。」

神がそうしろって言ってんだ」

ファ

「……………」

……旧文明人じゃないとしたら……

ミカとワイナールに嘘を言わせてるな？」

ミレ

「ええ、私がシヌさんに許可を出しました。
信憑性が増したでしょう？」

ファントムは呆れ顔をして、壁に寄りかかる。

ファ

「……とんだペテン師達だな」

ミレ

「どう思おうと構いませんが、これは貴方の性格を考慮しているんです」

ファ

「どういう意味だ？」

シヌ

「仲間思いつてのは……」

いつか何かを犠牲にしないといけない。

君の場合は……心だな」

ファ

「心……？」

シヌ

「いつかわかる。」

その時には

t w e l v e p u n i s h e r の正体がわかつていると思う……
……

話す事は話した。

マリちゃんと仲直りしてこい」

ファ

「何で知ってるんだよ」

しかし仲直りしたいのは山々なので、部屋を後にした。

シヌ

「……………」

ミレ

「今になって仲間を求めれば、貴方は犠牲を払う事になりますよ」

シヌ

「……………」
ああ、そうだな」

ファントム同様、シヌも部屋を後にした。

2章：0 ～ペテン師～（後書き）

twelve punisherの全員の名前がやっと判明しましたが、読みづらくてすみません。

リゼン・シュレイド

胃不魔・豪飢

アルベルト・キツシャー

は別項で紹介します。

「王権、食、虚実、チューザレ」(前書き)

“王権”追加

“食”追加

“虚実”更新

チューザレ追加

何のインフォメーション？

く王権、食、虚実、チューザレく

リゼン・シュレイド

L v 2 1 0

性別・男性

年齢・20歳

種族・ニューマン

身長・173cm

体重・55kg

タイプ・“王権”

支配型

髪・7…3分け、青

服装・燕尾服

所属・twelve punisher?

何百年も昔に起こった

4種族の大戦争を終結させたデイグニティ家の末裔。

バアルの親戚であり、デイグニティ家の先代はレディである。

デイグニティ家に仕えていた頃……

狂神の信念時の惨劇に異常な恐怖を覚え、第2の狂神の信念を阻止する為に、デイグニティ家の当主になってグラールを統治しようと企てる。

しかし誤算が連なったせいかな計画は頓挫。

テロリスト犯として

ケイリヨン刑務所に服役していた。

居場所を掴んだ

twelve punisherは刑務所を襲撃するも既に囚人は移動されており、現在は別の刑務所に服役している。

現在、twelve punisherに対して仲間意識は無い。

胃不魔・豪飢

(イズマ・ゴウキ)

Lv200

性別・男性

年齢・31歳

種族・ビースト

身長・223cm

体重・209kg

タイプ・“食”

攻撃型

髪・セミロング、緑

服装・橙ジャージ

赤パーカー

所属・twelve punisher?

タイプは“食”だが、

別に太っているわけではない。
逆にムキムキだ。

異常にカロリーを消費する為か、行動後は何かを“食”さなければ
ならない。
人間的な食べ者を摂取しないと、ヒトから建物まで何でも“食”し
てしまう。

実は、狂神の信念時にクリンサ街で暴れていたOFMの正体である。
その為、死亡している。

アルベルト・キッシャー
Lv250

性別・男性
年齢・20歳
種族・ヒューマン
身長・178cm
体重・66kg
タイプ・“虚実”

運命型
召喚型

髪・後ろのトゲトゲが 目立ちにくい髪型 灰色
服装・イロハフブキ、黒
所属・twelve punisher?

twelve punisher内でもかなりの実力者。かつ、メンバーから変わり者呼ばわりされている。

制裁者の中でも強力な力、“虚実”を司っている。

（能力については1章…2の後書きに記述）

都市リノヨにある裏カジノを壊滅させた人物であり、それに伴ったヒト殺しを何とも思っていない。

怒りでもなく、快楽でもなく……

何も感じない。

……………

例えるなら、人間が息するのと同じ。

日本的な文化を好んでいるのか、

服にイロハフブキ、

武器に鉄扇を使用する。

その為かはわからないが、日本刀を使うファントム（制裁者）とは仲が良い。

元々twelve punisher達の仲間ではなく、シヌと知り合いだったようだが……？

キログマ・チューザレ

性別・男性

年齢・49歳

種族・ビースト

身長・191cm

体重・80kg

髪・後ろに束ねている

茶色

服装・特注のタキシード

白

所属・チューザレ

ファミリー

ニューデイズの

都市リノヨに根付くマフィアのボス。

地下で裏カジノを経営していたが、アルベルトによって破壊されファミリーの2／3が機能していない。

壊滅後……

ガーディアンズにカジノの違法性を追求され、大人しくしている。

ゴールドに買収されており、口止めに400万、監視カメラの映像に1000万を貰っている。

しかしながら罪悪感を感じており、早急に犯人を見つけて舎弟の為に報復したいようだ。

ゝ王権、食、虚実、チューザレゝ（後書き）

“虚実”の能力で
楽しんですみません。

2章：1　く仲直りく（前書き）

自分の変態性が物凄く
出ています。

2章：1 仲直り

オウトク山での会議よりも、1日前……

パルム

クリンサ街跡地

狂神の信念時に、惨劇の舞台になった街。

今となつては誰も住んでおらず、血の跡や壊れた建物しか残っていない……

そんなゴーストタウンを誰か歩いている。

アル

「重いですね……」

リアカーにアタッシュケースを乗せて引っ張っている、“虚実”のアルベルトだ。

アル

「……………」

……………」

「……………ここですか……………」

やがて、旧倉庫地区のある場所で止まった。
焼けて黒くなっている地面がある。

アル

「“嘘”として。

胃不魔・ゴウキさん……………」

貴方はここでファントムさんに倒された」

そう口に出す……………」

すると、黒い焼け跡が無くなっていき……………」
身長2mを越す大男が突如現れた。

彼が胃不魔・ゴウキ。

ゴウ

「……………ゲホ！　ゲホ！

……？……

……ここは……」

アル

「おはようございます。

つと言っても今、夜ですけど」

ゴウ

「……誰だお前？」

アル

「今のゴウキさんが知らなくて当然ですね」

アルベルトはゴウキの首に手刀を食らわし、気絶させた。

アル

「皆さんと会えば……

自分が何なのかがわかりますよ」

リアカーのアタッシュケースの上に乘せると、また歩き出した。

現在

ニューデイズ

オウトク山

グラール教団

会議が終了して各々解散する……

……が……？

ヴィ

「皆さんは……

変だと思いませんでしたか？」

ヴィヴィアンが、解散しようとするヒト達に問いかける。

ライ

「？ ……何が？」

ヴィ

「カレンさん、

妙に落ち着いていたし……

……話が……強引じゃないですか？」

募っていた疑問を口に出してしまう。

カレ

「別に…私は……」

リリ

「珍しいわね、ヴィヴィアン。
そんなに強引だった？」

タイ

「そうだな。

強引過ぎるわけでもない。

証言者もいる」

証言者とはミカとワイナールの事だ。

ライ

「まあ裏に何か有ろうと無かろうと、グラールの為なら構わないさ。
……そうだろ？」

ヴィ

「……………」

そうですね……

……………」

ごめんなさい……………」

すぐに立ち上がって、
最初に出ていってしまった。

マリ

「……………」

ファントム来てないかな」

マリも立ち上がって、
出ていった。

バア

「僕はリゼンに会いに行こうかな」

ライ

「まだ仕事が残ってるだろ」

バア

「そうでしたっけ？」

ライアとバアルが出ていく。

カー

「では私も帰還するでしょう」

カーツも出ていく。

タイ

「私は船に戻っている。」

マリがついてくるかどうか聞いといてくれ」

リリスとロストに言い残し、船に戻ってしまった。

カレン、リリス、ロスト、ミカ、ワイナールが残る……

ロス

「ま、ヴィヴィアンが言った事は間違っではない」

突然ロストが喋り出した。

リリ

「どういう意味ですか？」

ロス

「……俺もカレンが何かを隠してるって事はわかる。会議が始まる前から薄々感じていたんじゃないか？」

リリ

「……………」

カレ

「……………」

……私は……

ロス

「まあ、カレンが何を隠そうと知ったこっちゃない。

総裁の言った通り、グラールを救う為なら嘘や隠し事1つや2つ、
どうって事ない。

……………

……問題はミカとワイナールだ」

ミカ「……………！」

ワイ「……………！」

ロス

「リリスも気づいてるだろ。

シヌに聞かされた部下は、太陽王の組織に存在しない」

カレ

「何……………？」

ロス

「そこまでは聞かされていないのか……………」

リリ

「私達の組織は、太陽王の組織を調べ尽くしましたからね。

……………

実際、どうなんです？」

ミカとワイナールに問いかけた。

ミカ「……………」

ワイ「……………」

白状しない2人……

リリ

「黙っているという事は……

嘘を言った……

……いや、嘘を言わされたという事ですネ？」

シヌ

「そこまでだ」

まるで見計らったかのように会議室へ入ってきた。

シヌ

「ロスト君リリスちゃん、勘が良すぎる。」

細かい事は気にするな」

一瞬にしてロストとワイナールの額に触れる。

すると意識を失って倒れてしまった。

カレ

「!？ 何をした？」

シヌ

「あらかじめ用意していた記憶を流し込んだ。
起きた頃には疑問は無くなっている。

……カレンちゃんも……

いじくられたくなかったら深追いはするな。

星霊は少し強引でも

グラールを救いたいんだ……

……

さあ、ミカ達は仕事の時間じゃないか？

会社に遅刻するぞ」

ミカ

「シヌ……」

ワイ

「僕達が真相を知る時は来るのか？」

シヌ

「……………」

来ない……

来た場合、グラールはバランスが崩れて滅びる。

……………」

……それを阻止する為にファントム君はいる。

彼が全てを知って引き受ける。

……………」

神頼みならぬ、人間頼みだな」

教団内廊下

トボトボと歩いている

ヴィヴィアン。

後ろからマリが追いかけてくる。

マリ

「意気消沈って感じだね？」

ヴィ

「マリさん……」

……

……

私……

……

自分の事が許せません……

あんな風にヒトを疑って……

グラールを救う為ならって答えも出てたのに……」

マリ

「仕方がないよ……」

誰だって他人を疑うし、答えを見落としてる時だってある……

……

って言っても、

ヴィヴィアンの疑問は間違っていないよ」

ヴィ

「？」

マリ

「カレンさんが何か隠してるのは明白。

ミカさんとワイナルさんも嘘言ってる。

……それに……

ファントムもお兄さんもロストさんも、何か黙っている。

……

男ってのはどうしてそうかな……

たぶんファントム達はその中でも特殊だろうけど」

ヴィ

「男のヒトって、そういうものなんですか？」

マリ

「良いところ見せたいんだよ。」

ファントムは仲間思い過ぎだからだけど」

ヴィ

「なるほど……」

まだ勉強不足ですね私……」

ヴィヴィアンが微笑んだ。

マリもつられるように微笑んだ。

それを廊下の曲がり角で聞いているファントム。

ファ

「……………」

(ファ)

おかしいな……

マリの読心術が明確なものじゃない。

これまでは読み取った事全てを言い当てたのに……

………

もしかして神関連の事は読み取れないのか？

俺が初めて神と遭遇した後も聞かなかった……

ファ

「……まあ良いか……」

ヴィ

「何だか落ち着きました。

ありがとうございます……！」

………そういえば、この後どうするんですか？」

マリ

「ファントムを見つけて謝らせる。

アタシの気分が良かったら、隠し事も聞かないであげようかなって」

ファ

「何だよそれ……」

ヴィ

「では、リリスさんとロストさんと一緒に帰りますね」

マリ

「うん。　じゃあね」

ヴィヴィアンに手を振るマリ。
ヴィヴィアンは走りながら手を振り返した。

マリ

「ふう……」

早くファントムを探そう」

ファ

「……俺はここだぞ」

後ろから声が聞こえて、ビックリするマリ。

マリ

「ほわぁー!!」

……ってファントムかい!」

ファ

「元気だな」

マリ

「うるさい。」

………

もしかして聞いてた?」

ファ

「んー、まあな」

マリ

「じゃあわかるわよね?」

手を広げるマリ。

マリ

「自分が悪いと思ってるなら抱きついて」

ファ

「え……？」

君にも落ち度が……

マリ

「何か言った？」

ファ

「いえ、何でもないです」

自分よりも10cm以上も背の小さいマリを抱き寄せる。

マリはファントムの背中に手を回し、頭を胸に当てた。

ファ

「やっぱりマリは可愛いな……」

マリ

「それで許してもらうつもり？」

「……次は……」

胸から頭を離し、ファントムの顔を見る。
ほんの少し口をすぼめる。

ファ

「わがままな子だな」

マリの頬に手を当てて、濃厚なキスをする。

マリは満足そうな顔する。

同時に頬がピンク色になっていき、恍惚な笑みを浮かべる。
少しすると顔を離した。

マリ

「正解。」

望み通りにしてくれてる」

だんだんとマリの体が火照っていく。

マリ

「ハア……ハア……」

もう3日もしてないよう……

ファントムにはムカついていたけど、すごくしたかったんだよう？」

息が荒くなり、甘い声を出す。

マリ

「我慢出来なくて自分で慰めたけど……

全然満たされなくてえ……

やっぱりファントムじゃないとムリィ……

………

お願いファントム……

してえ……」

その場で上着を脱ぎ始める……
しかしファントムが止める。

ファ

「帰ってじっくりすれば良い」

マリ

「ふえゝん……

意地悪う……」

涙目になるマリだったが、ファントムに手を差し出されて繋いだ。

ファ

「帰ろう」

マリ

「うん……！」

マリは目の涙を拭いた。

2章：1　く仲直りく（後書き）

カレンは、星霊がミレイを生き返らせたと思っています。

ミカとワイナールは、星霊ではないと思っています。

ロストとリリスは、意識を取り戻した後に何故か納得しています。

何故ファントムだけに秘密を言うのか？

世界のバランスがおかしくなるから、必要最低限のヒトにしか言えないのはありますが、

秘密を知ったら、仲間ファントムを戦わせまいとするでしょう。

2章::2 　　く悪夢・血く　(前書き)

果たして、この夢は何なのか!?

2章::2 〔悪夢・血〕

ベチャ……ベチャ……

真つ赤な血がリトルウィングのロビーに張っている。

ベチャ……ベチャ……

血だけではない、ヒトのと思われる肉片や内臓が散らばっている。

ベチャ……ベチャ……

血の上を歩く少年。

血に映った少年の顔……

頬に血をベツトリとつけている……
ファントムだった。

無表情

その言葉に尽きる顔だ。

持っているサンゲは真っ赤に染まり、
鈍い光を放っている。

ベチャ……ベチャ……

……

……

事務所の前で止まる。

そこには、

腕と足と胴体と……

頭は無かった……

しかし、それらしき肉片がある……

ナギサよりかは短い黒髪をしている。

胴体に纏っている服……

それは元々ファントムの私服だった服……

赤いブレイブスコート。

そう……

この遺体はマリだ。

ファ

「……マ……リ……？」

……
誰……が……

……
……俺？……

俺が殺した？

……

そんな……バカな……」

ガシッ！

マリの腕がファントムの腕を掴む。

ファ

「！！！」

足もファントムの足に絡む。

バシヤア！

腕と足に転ばされる。

赤原礼装の黒い部分が赤くなっていく。

同時に胴体が近づいてきて、ファントムの胸に乗る。

ファ

「や……やめてくれ……」

肉片と化していた頭部がズルズルと動いて、
ファントムの顔の横にたどり着く。

口と思われる場所が少しずつ動く。

マリ

「皆……死んだね……」

ファ

「う、うわああああああああああああ！……！」

目の前が真っ赤に染まった……

クラウド6
リトルウィング
居住区 ファントム自室

ファ
「っはー!!」
……ハア……ハア……
ハア……ハア……

……
……
夢……か……

「……………」

隣で寝ているマリを見る。
熟睡している。

帰ってから休み無しでして、マリが失神するまでしていた。

服を着る気力も無い程疲れていたので、2人共裸だ。

ファ

「……………」

マリにかかっている布団を捲る……

可愛い寝顔に綺麗な肌、豊満な胸……

夢で見た状態ではない事に、ファントムは安堵する。

ファ

「……何て夢を見てんだ……俺は……
……」

時間を確認すると、
まだ朝の4時だった。

ファ

「……………」

すっかり目が覚めたな……」

ベッドから降りて、落ちているトランクスを履いた。
次にフロンティアウイングのズボンを履いた。

冷蔵庫まで行き、甘いオレンジジュースを取り出して飲む。

ファ

「何だったんだ……
あの夢……」

残ったジュースを冷蔵庫に仕舞う。

マリ

「ファントムウ」

どこ？」

マリの甘い声が聞こえてくる。

どうやらまだ満たされていないようだ。

ファ

「3日我慢しただけで凄い反動だな……」

先ほど見た夢を頭から消し、ベッドに向かった。

2章::3 く別の仕事く (前書き)

風邪ひいて頭回らない

(ㇿ、)

2章：3 別の仕事

オウトク山の会議から

1日後……

クラッド6

リトルウィング事務所

ファントムはいつも通りに事務所へ行き、仕事が無いかチェルシーに確認をしてもらっていた。

マリは動けないとか言って寝ている。

（ファ）

俺だって体ガチガチだったの……

心の中で愚痴る。

チェ

「ファントム」

ファントム」

気づけばチェルシーが呼んでいる。

ファ

「ん？ ああ、すまない。

どうしたんだ？」

チェ

「仕事ヨ、仕事。

サッキコレ来タネ」

依頼書に目を通す。

依頼者は

ガーディアンズ

機動警護部隊長のバアル

内容は……

5日前に起こった裏カジノ襲撃事件で明らかになった、被害組織チューザレファミリーの違法カジノの容疑が固まったので、

家宅搜索を行う。

傭兵を派遣してほしい。

ファントム推薦。

という内容だが……

ファ

「リトルウィングと関係ないだろ」

チェ

「ソウ言ワズに。」

リトルウィングは来ル者拒マズヨ」

ファ

「まあそうだが……」

(ファ)

俺を指定……か……

ファ

「じゃあ行つて来る」

チェ

「行ッテラッシャ〜イ」

ガーディアンズ

ニューデイズ支部

ロビー

ロビーで待っていると、バアルが少ししてから来た。

バア

「来てくれてありがとう」

ファ

「俺を呼んだって事は……
昨日の話と関係が？」

バア

「そうだよ。」

それに、今日家宅搜索出来るのは当事者のお陰かな？」

ファ

「当事者？」

ボタン！

研究室の扉が開き……

シヌ

「はーなーせー！」

マヤ

「良いから見せないよ！」

シヌがマヤに手を引っ張られている。

ファ

「何やってんだ？……」

バア

「シヌ君のAフォトンが見たいとか……
シヌ君はスタミナ使うから嫌だって」

ファ

「なるほどな……」

……シヌがガーディアンズの手助けを？」

バア

「そう、事件に関与してるから昨日証拠を探していたらしい……ミレイさんも来てるんだけど、公には出来ないから仮面を被っているって」

ファ

「そうか……」

……

そういえば……

家宅搜索って調査部じゃないのか？」

バア

「僕は他に用事があったからここにただで、ついでに依頼しただけだよ。」

だから調査部の方全般で協力しあってくれ」

ファ

「ついでに……？」

（リゼンの事か……）

……

まさか、調査部の誰かに昨日の事を？」

バア

「何人か……」

……まずかったかな？」

ファ

「……いや、別に……
誰に教えたんだ？」

バア

「ルミアちゃん、マヤさん、ルウちゃん。
話してわかるヒトに限った」

(ファ)

3人共強いが……
制裁者相手に渡り合えるのか……？

シヌ

「ちょっと助けてくれ！」

シヌが叫び声をあげた。

ニューデイズ
都市リノヨ
チューザレファミリー
事務所

乱立する大きなビルの上に、チューザレファミリーの事務所はある。
カジノは事件直後に調べ終わっているの、残すは事務所だけなのだ。

ルミア、ルウ、マヤが複数のガーディアンズを率いて、事務所に入る。

ファントムは事務所捜査が目的ではないものの、手伝っている。
バアルは用事を済ましに行ったので居ない。

ファ

「これじゃあ普通の仕事だ……」

ルウ

「ファントムさん。

これを外に」

証拠品が入っているダンボールを渡される。

ファ

「了解」

渡されたダンボールを外に出しに行く。

この事務所の持ち主

キログマ・チューザレ

は、シヌと仮面を被ったミレイと別室で話している。

仮面はグラール教団で使っている物だ。

ミレイの正体をルミア達は知っているが、無関係なヒトに混乱を与えない為に仮面を被っている。

ファ

「だいたい制裁者と何の関係があるんだ？」

疑問と不満を持ちながらも、次の荷物を取りに行った。

隣の部屋

キログマとシヌ達は、ソファーで向かい合って座っていた。

キロ

「……貴様らはガーディアンズではないな……
どういう見だ？」

シヌ

「カジノの映像が欲しい。
それだけだ」

キロ

「だったらあっちの部屋で探せば良いだろう」

ボコッ

シヌがチューザレの腹を殴る。

キロ

「ゲホッ、てめえ……」

首を掴み、体を持ち上げる。

シヌ

「さっさと言え。」

さもないと……

ミレ

「殺すのは神に背きますよ」

渋い顔をする。

シヌ

「わかってるって。」

……

どこにあるっ……」

キロ

「し…知らん……」

ナイフを肩に突き刺す。

キロ

「！…！　グワァァ……ん！？」

叫び声をあげない様に口を押さえる。

ソファァーに打ち付ける。

シヌ

「どこだ」

口を少しでも開ける。

キロ

「ゴールドと言う奴だ……」

金と引き換えに口止めと、映像を渡した」

シヌ

「ゴールドか……」

あのバカがしそうな事だ……

……そいつの居場所は？」

キロ

「知るか……」

取引してすぐ居なくなるんだ……」

シヌ

「……まあ、そうだな」

ソファアーに座らせ、ナイフを抜いた。

キロ

「痛っ……！」

てめえら、こんな事して……うつ……」

額に触れると、気絶してしまった。
同時に肩の傷を治す。

ミレ

「また記憶を偽装したのですか？」

シヌ

「別に良いだろ？」

神が与えた特別な力だ。

亜空間を使う俺しか出来ない」

シヌの亜空間による洗脳は、脆弱な精神を外側から支配するカムハ
ーンと違い、心を亜空間でこじ開けて内側から支配する能力。
記憶の改竄はそれを応用したもの。

1日1回程しか出来ない能力だが、シヌに合っている能力だ。

シヌ

「もう聞ける事は無い。

次はカジノの生き残りの構成員だな」

ミレ

「ええ、ガーディアンズの仕事が終わり次第向かいましょう……

……

何の音です……？」

シヌが耳をすますと、
ヘリのローター音が聞こえてくる。

窓の外を見ると、ヘリが近づいてきた。

シヌ

「隣の奴ら連れて逃げろ。
俺が食い止める」

ミレ

「わかりました。
無理しないで下さい」

シヌは「ああ」とだけ言うと、窓際にAフォトンの壁を作った。

ミレイは捜査が行われている部屋に入った。

真っ先にルウの場所へ行く。

ミレ

「（すぐに捜査を中止して、帰還して下さい。
例の組織に感ずかれました）」

ルウ

「了解しました。

……皆さん、捜査は中止して帰還します。
すぐをお願いします」

明らかに不審がるガーディアンズ。

それもそうだ……

仮面を被っているヒトが、今ここで捜査を変更させた様に見えたのだから。

しかしルウがここの指揮者なので、反対意見は無い。

（ファ）

ん？ どうしたんだ？

………

……っ！？………

大きな爆発音と共に、
非常に大きな揺れが響いた。

2章：3 別の仕事（後書き）

シヌ側は出来るだけ派手に行動はしない……
制裁者側はドンパチしても構わないみたいです。

2章：4　く転生の兆候く（前書き）

「ファントムに異変!？」

2章：4 転生の兆候

ニューデイズ

都市リンヨ

チューザレファミリー

事務所

爆発音と激しい揺れが響く。

ファ

「チツ……」

M92Fのセーフティロックを外し、シヌのいる部屋へ向かった。

マヤ

「もしかして……」

シヌ君はあっちにいるし……

……

よし……！」

マヤも続くように
隣の部屋へ向かった。

ルミ

「何なんですか!？」

ルウ

「落ち着いて下さい。

私達2人で隊員を退避させますよ」

ルミ

「は…はい!」

ルウとルミアは隊員達を誘導し始めた。

(ミレ)

口封じの為にこんな事をするなんて……

……ここはルウさん達に任せて、私も加勢しに行きますか……

隣の部屋

シヌはAフォトンの壁を解き、窓の外を見た。

ミサイルとミニガンが搭載されてある武装ヘリが、数m程先にある。
ヘリの操縦室にロドリゴとゴールドが見える。

ファ

「どうしたんだ!？」

銃を手にとって、部屋に入ってくるファントム。
何故かマヤも入ってきた。

マヤ

「これは……」

マヤが部屋を見渡すと、驚いてしまった。

部屋の中はごちゃごちゃで、足の踏み場も無い。

ファントムは何とも思っていないのか、気にせずシヌの場所へ行く。

シヌ

「奴らだ。」

俺達で倒す。

……マヤちゃん、チューザレを運んでくれ」

マヤ

「待ってよ。」

せっかく貴方の力を見に来たのに……」

シヌ

「わかったわかった……」

帰ってから見せるから、そいつを連れていけ」

マヤ

「うゝん……」

わかったわ……」

キロ

「何を勝手に決めている……」

本に埋もれていたチューザレが起き上がる。

キロ

「私は口止めのせいで部下の仇も取れず、口止めの意味は部下を殺した仲間だとわかっていた……
なら……今ここで……

……グッ!……」

シヌがチューザレを蹴り倒した。

シヌ

「奴らの狙いは君だ。

君が死んだら奴らは逃げる……

組織の居場所を知るまでは避けたい事だ。

マヤちゃん、早く」

マヤ

「わ……わかったわ……」

若干シヌに引きながらも、チューザレを連れて出ていく。

今度はミレイが入ってくるが……

ミレ

「……私はチューザレさんを守った方が良いみたいです」

シヌ

「頼む」

状況から考えてか、

チューザレの警護に回る。

シヌ

「さて……」

ファントム君は制裁者達との戦闘は初めてか……」

ファ

「そうだな。

どう戦うか教えてくれよ、シヌ先生」

シヌ

「簡単だ。

……戦闘本能全開で殺しにかかれ。

奴らは死なないし、戦闘不能後は俺とミレイの仕事だ」

ファ

「簡単に理解しやすいです」

ヘリが側面がファントム達に向く。

ドアがスライドして、
ゴールドが姿を現した。

ゴ

「おお！

ファントムだぜ！

大佐、見てみろよ！」

ロド

「言われんでもわかっておる！
それよりチューザレはどこじゃ！？」

ゴールドが目を凝らす。

ゴ

「いない……！」

たぶんさっき出ていった2人じゃないか？」

ロド

「なら儂が追う。」

お前さんはシヌは殺せ」

ゴ

「良いのか!？」

ハハハ! 嬉しいぜ!」

助走をつけて、ビル内に乗り込んだ。

ロドリゴはヘリを操縦して、下へ向かった。

シヌ

「街中でヘリはないだろ」

ゴ

「お前だって少し前まで派手にやっていただろ」

シヌ

「まあな。」

だから、次は君達で派手にいこう」

シヌは亜空間から

2本の黒餓を取り出す。

ファントムもサングを出そうとするが……

ゴー

「ファントムは出さなくて良い。
私達は争う仲ではない」

ファ

「何だと？」

シヌ

「無駄話をするな！」

左の黒餓でゴールドに突く。
ギリギリのところで避けるゴールド。

ゴー

「危な……！」

シヌ

「“もう一回”死ね」

右手の黒餓で横に再度斬り込む。
しかし、サマーソルトをして避ける。

シヌ

「少し前より動きが良いな……」

ゴー

「怒りに駆られなければ良い話。
落ち着けば避けれる」

ファ

「……………」

シヌ

「ファントム！」

さっさと武器を出せ！」

ハッと、目が覚めたかのようになるファントム。

ファ

「……………すまない……………」

サンゲを取り出して構える。

(シヌ)

予想以上に早いな……

ゴールドとそんなに親しかったのか？

ゴ

「隙だらけだ！」

エンドイフでシヌを攻撃するが、片手で受け止められる。

もう片方の黒餓をエンドイフの隙間に入れて、動きを封じる。

ゴ

「!？」

シヌ

「いくら攻撃が避けられても、力の差が違う。

……ファントム君、動けない様に足の健を斬れ！」

ファ

「ああ！ わかった！」

いつもの気迫が戻ってきたファントム。

ゴールドの後ろへ回り込み、健を斬ろうとしたが……

ドクンッ！

急にファントムの動きが止まる。

サンゲを落とした。

シヌ

「ファントム君？

……

まさか……」

隙間に入れている黒餓を、ゴールドの胸に突き刺した。壁にも突き刺し、動けない様にする。

ゴー

「クソッ……！」

……と言いたいが……

今のファントムは
案外脆い精神だな」

シヌ

「どうしたら止まる!？」

ゴー

「さあな……

自分で考え……

……

おい、それはないだろ……」

シヌはゴールドを窓の外へ出す。

シヌ

「試しに……

ファントムから遠ざけよう」

ゴー

「待て！

死んだら……

シヌ

「死なないだろ」

黒餓をゴールドごと浮かし、一気に引き抜いた。

ゴールドだけ転落していく。

ゴー

「クッソオオオオオオオ………」

………」

地面に激突して体が四散したのを見届けると、ファントムの方へ向かう。

シヌ

「おい！

ファントム君！

ファントム君！」

虚空を見つめるかの様に、目に力は無い。

シヌ

「まだ転生しきっていない状態だな……
この状態でもミレイが必要だな」

サンゲを拾い、
ファントムを担いでミレイの居場所へ急いだ。

ビル 5階
階段 踊り場

エレベーター、転送装置が全て壊れていたので、階段で下へ向かうルミア達。

しかし、ここまで降りてきて誰1人一般人がいない……

ルミ

「おかしいですね……

あんな揺れがあったら、避難を開始していると思うんですが……」

マヤ

「部屋は確認した？」

ミレイとマヤとチューザレ（気絶）が遅れて合流する。

ルミ

「マヤさん。

部屋は確認してないですけど……

……

……ファントムさんとシヌは？」

ミレ

「彼らは、攻撃してきた者達を食い止めています。

それよりも……

確かにヒトがいませんね……」

ルウ

「この建物は29階建て、使用者数は何百もいますが……私のセンサーに生体反応が全く映りません」

ルミ

「範囲は？」

ルウ

「全ての階です。」

屋外はわかりませんが……」

ドゴオオオン！！

またしても大きな揺れが響く。

ルミ

「もう……！！」

次は何ですか！？」

上の階から煙が出てきている。

その煙の中から……

神々しい光を放つ

天国の母が姿を現す。

ルミ

「な……！？」

ヘブンスマザー！？

VR空間の敵なのに……！」

ルウ

「考えてる暇はありません。
逃げましょう！」

ヘブンスマザーは逃げ出すヒト達に銃撃を始める。
しかし、運良く被弾しなかった。

母はゆっくりと動き出した。

ビル 1階
正面ロビー

命からがらへブンスマザーから逃げ、
ロビーにたどり着いたが……

ルミ
「何ですか……これ……」

目の前に広がっていたのは、ガーディアンズのおびただしい死体だった。

全て頭を撃ち抜かれている……

ルウ

「見張り部隊と……
ニューデイズ支部から来た応援部隊でしょう……」

マヤ

「誰が…こんな……」

ガチャ……

トイレの扉が開いた。

出てきたのはロドリゴだった。

ロド

「年取るとトイレが近いわい……
……っと、やっと来たのう」

ルミ

「貴方がこれを……!？」

ロド

「まあそうじゃ」

ルウ

「ヘブンスマザーも？」

ロドリゴは首を傾げたが……

すぐに納得した顔した。

ロド

「儂ではない。

同志が“ゴミ”を収集する為に出現させているだけじゃ。

……誰も居なかったじゃろう？

銃に被弾すると転送されるんじゃ」

ミレ

「どこに転送するんです？」

ロド

「その声……

……

ふん、教えるわけなからう」

ミレ

「そうですか……

なら力づくでも話してもらいます。

皆さん、私が引き付けるので外へ」

マヤ

「大丈夫なの？」

ミレ

「余裕は……

ありませんね」

階段からヘブンスマザーが降りてきた。

シヌ

「邪魔だ！」

しかし、降りてきたシヌに縦に真っ二つにされた。

シヌ

「ファントム君を連れて逃げろ！」

ガーディアンズ隊員に
ファントムを預ける。

シヌ

「ミレイちゃん……！
君も逃げろ！」

ミレ

「いえ、私も……」

シヌ

「（ファントム君が転生しかけている、
君でしか症状を抑えられない。

“虚実”もいるぞ）」

ミレ

「！！！！」

……わかりました……」

シヌに背を見せて、ガーディアンズを先導し始める。

外へ出ると、騒ぎを聞き付けた野次馬と、応援部隊の船があった。

マヤ

「シヌ君は！？」

ミレ

「彼は大丈夫です」

ルミ

「ファントムさんは！？」

ミレ

「彼も大丈夫です。

早くここを離れますよ」

近場の船に乗ると、ルウが起動させる。

ルウ

「次の応援部隊を呼びます」

ミレ

「屋内には入れないで下さい。

あくまでも非常線を張るだけで」

ルウ

「……了解しました」

ミレイの簡潔な指示を聞くと、船を動かし始めた。

ミレイはファントムを別室に移して、横にする。

ルミアも付き添う。

ミレ

「彼の手を握ってください」

ルミ

「え？　はい？」

ミレ

「早く」

ルミ

「わ、わかりました」

少し恥ずかしがって、
ファントムの手を握る。

すると、ファントムの目がだんだんと落ち着いてきて、
ゆっくり目を閉じた。

(ミレ)

この程度なら私は必要ありませんね……

ミレ

「そのままですって下さる」

ルミ

「え!？」

ちよっと……」

ミレイは部屋を出て……

ミレ

「すぐに安全な場所へ行って下さい」

そう言って、船を降りた。

2章：4 〽転生の兆候〽（後書き）

ファントムの異変とは？

ヘブンスマザーが何故？

ヒトを収集している理由とは？

ちよくちよく謎を確認しないと、わかんなくなってしまう……

2章：終　　ゝ旧友ゝ（前書き）

最近、納得出来る内容を書けない……

2章：終　　く旧友く

ニューデイズ

首都刑務所

面会室

強化ガラス越しに、バアルとリゼンが向かい合っている。

バア

「久しぶりだな。
半年振りか……」

リゼ

「バアル様……
どうしたんですか？」

バア

「様付けは止めてくれ。
……まあ、今日は聞きたい事があったね」

リゼ

「聞きたい事……ですか？」

バア

「単刀直入に聞くが……」

……今の“君”は旧文明人か？」

……

……

……

リゼ

「嫌ですね……

そんなわけではないでしょう」

呆れた様子で答えた。

バア

「……だな……

変な事聞いて……

リゼ

「やはり……

ミレイ様はそう言ったのか……」

その言葉に全く反応出来なかった……

バア

「……………」

何故……

リゼ

「私は旧文明人ではなく……

第1人類なんですよ。

もっとも、この体はこの時代の物ですが……」

バア

「……………」

何と返したら良いのかわからず、絶句してしまうバアル。

リゼ

「答えましたよ。

さて、私は戻ります」

バア

「待て……！」

何でミレイさんと話した内容を知っている……」

リゼ

「私の力は“王権”。

誰かを操る事は簡単です。

出所した囚人に潜入させたんですよ。

これ以上はミレイ様かシヌに聞いて下さい」

席を立ち、出入口に向かう。

バア

「おい！ まだ話は……

……」

刑務官に肩を取られる。

リゼ

「既にここは……

私の国なんですよ」

ニューデイズ

都市リンヨ

ビル内 1階 ロビー

シヌはガーディアンズ達を逃して、ロドリゴと対峙した。

ロド

「ゴールドの坊主はどうした？」

シヌ

「さあ？

外でバラバラになってるんじゃないか？」

ロド

「落としたのか……
極悪非道じゃな」

シヌ

「シフフフフフ……！
お前達には負けるよ」

ロド

「……まあ良い。

儂らにはアルベルトがいる」

アルベルトと言う名前に眉を動かした。

シヌ

「なるほど。

アルーの力なら

ヘブンスマザーも召喚出来るか……

アルーはどこだ？」

ロド

「貴様の後ろだ」

シヌ

「!!」

鉄扇がシヌの首を押さえる。

アル

「お久しぶりです。
シヌさん」

シヌ

「君に名前を呼ばれると吐きそうだ」

余裕をかますシヌ。
しかし、顔はひきつっている。

ゴー

「せっかくの再開なのに酷くないか？」

先ほど体が四散した
ゴールドが、階段から向かってきた。

シヌ

「アルーの能力か……
これだと、アンナとカザリの傷も治しているな……」

アル

「ええ、既に完治していますよ。
今は別の仕事です」

シヌ

「予想以上だったな……

お前達みたいなきずが……

……クッ！……」

ロドリゴに頬を思いっきり叩かれた。

ロド

「なんじゃ……

痛みを感じておるではないか……

……

良し……

アンの嬢ちゃんに拷問でもさせるか」

シヌ

「チッ……」

ミレ

「そのヒトから離れなさい！」

船を降りてきたミレイが
ナ・グランツで攻撃する。

光の矢は外れたが、
制裁者達を遠ざける事は出来た。

ミレ

「大丈夫ですか？」

シヌに駆け寄るミレイ。

シヌ

「ファントム君は……？」

ミレ

「私の力を使わなくとも、信頼できるヒトが居れば大丈夫です」

シヌ

「影響が少なかったお陰か？」

立ち上がって黒餓を構えた。

アルベルトも戦う気があるようで、鉄扇を2つ出す。

しかし……

ゴー

「通信だ……

……

……

……わかった。

……

確保完了。

後は奴が始末してくれる」

ロド

「と言う事は……」

アル

「シヌさんと戦いたかったですが……

チューザレさんを追う必要は無くなりました。

ここにも用はありません」

シヌ

「逃げるのか？」

アル

「じゃあこれで楽しんで下さい。

当初はVRのバグかと思いましたが……

別次元にこれが存在するみたいですよ。

.....

“真実”として
ここにはヘブンスマザーがいる」

そう唱えると、
ヘブンスマザーが現れた。

アル
「また会いましょう。
シヌさん」

ロドリゴが閃光手榴弾を爆発させ、その場から立ち去ってしまった。

シヌ
「逃がしたか……」

ミレ
「それより……
どうしますか？」

シヌ
「わかっている」

先ほどと同じ様に、
縦に斬り込んだ。

ガキン！

しかし、全く刃を通さない。

シヌ

「硬い！？」

ヘブンスマザーは無防備になったシヌにカウンター攻撃をする。
浮いて体がぐると回り、剣がシヌを斬ろうとする。

ミレ

「光よ、
彼を守りなさい！」

ミレイが唱えると、

シヌに光のバリアが張られた。

剣は弾かれ、

シヌはミレイの傍に行く。

ミレ

「先ほど比べて、
戦闘に特化した個体ですね」

シヌ

「アルーの奴……
面倒なもの残しやがって」

ヘブンスマザーは次に、銃を乱射してくる。

シヌはAフォトンの壁を作る……
しかし……

ミレ

「シヌさん！」

ミレイはシヌを抱いて倒して、グランツを回避する。

シヌ

「ありがとう」

ミレ

「光よ、
敵を貫きなさい！」

マザーの体から光の棘が何十本も出てきた。

だが、ヘブンスマザーの属性は光なので効き目が少ない。
そればかりか、体に吸収して傷を治した。

シヌ

「仕方がない……」

黒餓を仕舞う。

シヌ

「ミレイちゃん
防御を頼む」

シヌは右手を前へ突き出し、Aフォトン凝縮し始める。

ミレイは何をしてるのがわかったのか、自分も含めて光のバリアを張った。

マザーは構わず銃、剣、グラントツで攻撃するが、バリアが通さない。

しかし……

ヒビが入り始める。

シヌ

「あと少しだ……」

Aフォトンが1cm程になった頃……
バリアが壊された。

ミレ

「シヌさん！」

シヌ

「離れろ！」

ミレイが後ろへ離れる。

シヌも後ろへ下がると、Aフォトンの粒をマザーに投げた。

ヘブンスマザーの腹部に触れた……

ギュイイイイン！

あっという間にヘブンスマザーを吸収して、粒は破裂した。

シヌ

「実戦では使わないと思ったけど……

成功して良かった」

ミレ

「ええ……」

シヌさん、天界で練習していましたから……」

シヌはAフォトンを異常に圧縮して、小さなブラックホールを作ったのだ。

しかし、大きいと自分が危険に晒される。

小さいと効果が期待出来ない。

それを見越して1cmが限界なのだ。

安全の為、対象吸収後にAフォトンが分解されて消える作りになっている。

シヌが持っていたのは、分解しない為の膜を張っていたからだ。

シヌ

「……フウ……」

終わったか……」

ミレ

「今日は行動的でしたね……」

やはり“虚実”がいるからでしょうか？」

シヌ

「だな……」

もう世間にバレても問題無いんだろう」

ミレ

「早く倒さないと……」

シヌ

「……そうだな……」

シヌとミレイは外に出て、野次馬を気にせずにガーディアンズを待った。

—
—
—
—
—
—
—

制裁者達の隠れ家

楕円形のテーブルに制裁者達が集まっている。

イスに座っているのは5人。

シェリーはエロ本を読んでいる。

ゴールドは計算機で金勘定している。

ロドリゴは何かに集中している……

アルベルトはアイマスクを付けて寝ている

ゴウキはハンバーガーを食べている

アンナとカザリは居なかった……

アアアアアアアアアア……！！

下の階から男の叫び声が聞こえた。

すぐにアンナの歓喜の声に変わった。

ロド

「今ので何人目じゃ？」

何かに集中していたロドリゴが聞いた。
叫び声に集中していたのだ。

シェリー

「今ので73人目だよ」

エロ本を読みながら答えた。

ロド

「あと100少々かの……」

アルベルトが調達した
“ゴミ”は、すぐに無くなるな」

ヘブンスマザーを改造して人間を集めた理由……
それはアンナの為だったようだ。

シェリー

「アルベルトさんはアンナさんが好きなんですか？」

アル

「違います」

シェリー

「起きてた……」

アル

「元々私は皆さんの敵だったんですよ？
頼み事くらい聞きます」

シェリー

「じゃあアタシとS……」

アル

「ダメです」

即答。

アル

「それはそうと……

ファントムさんの様子はどうでした？」

全員の動きが止まった。

ゴー

「私に会っただけで

“転生”し始めた。

しかし精神が少し弱くなっただけで、

“完全”にはならない」

アル

「そうですか……」

それ以上誰も話さなかった。

ガチャ……

廊下からカザリが入ってきた。

ロド

「ん？」

奴はどうした？」

カザ

「彼はまだ合流させないほうがいいです。

……大丈夫ですよ、チューザレさんも生き残りも始末しとくって言うてましたよ。

……

それよりも……

……入ってきて」

廊下からリゼンが入ってきた。

アル

「“王権”……

どこで見つけたんですか？」

カザ

「たまたま街を歩いていたら見つけたんです。
既に転生完了しているっす」

リゼ

「刑務所全体を国にしましたよ。
だから出所も自由」

リゼンが空いているイスに座ると、カザリも座った。

アンナを除いて4人分……
席が空いていた。

2章：終　　ゝ旧友ゝ（後書き）

残る制裁者は……

ファントム

エミリア

ナギサ

シズル

……

つまりカザリは

エミリアか、

ナギサか、

シズルに

会っていたという事です。

3章：0 〽悪夢・殺〽（前書き）

誤字を直しました。

バアル↓リゼン

早く読まれた読者様……
失礼いたしました。

3章：0 悪夢・殺

グサッ！

刃が肉を裂く……

ガーディアンズのロビーで俺はその感触感じた……

少女の胸に刺したサンゲを抜く……

グサッ！

次は腹を刺した。

グサ！！

今度は肩を……

グサ！！

そして首を……

最後に額を貫こうとした時……
俺は動きを止めた。

そしてハッとする。

俺は何をしているんだと……

ファ

「ルミ……ア……」

サングを手放し、ルミアを抱き抱えた。

服の上からでもわかる。

凄く冷たい……

ファ

「俺は、何をして……」

ルミアが何かを話そうとする……

しかし首に穴が開いてしまい、全く声が出ない。

ファ

「ルミア、ルミア！」

すぐに病院へ……
……！！！！……？？？？」

意識はあるのに体勝手に動く。

右手を上げルミアを殴ろうとする。

必死に俺は止めようする……

ボコッ！

しかし、体は言うことを聞かずにルミアを殴った。

ボコッ！
ボコッ！

何度も……

ボコッ！

何度も何度も

ボコッ！ボコッ！ボコッ！ボコッ！ボコッ！ボコッ！ボコッ！ボコッ！ボコッ！ボコッ！
ッ！ボコッ！

何度も何度も何度も何度も……！！！！

気づけばルミアの顔は
肉塊に化していた。

どうして俺がこんな事を？

仲間を守るんじゃないのか？

何で自分の信念を曲げる？

何故仲間を殺す？

俺は血塗れになった両手を見る。

真っ赤に染まっていく……

死んだルミア

俺

手

髪

服

地面

壁

ヒト

武器

全て

世界が赤くなる……

ファ

「う……」

うわあああああ！！」

—
—
—
—
—
—
—
—
—
—

ニューデイズ
ガーディアンズ
医務室

ファ

「っはっ！ー！」

……ハア……ハア……

ハア……ハア……

ハア……ハア……

L

0

5

ア

何だ……

L

•

10

•
•
•

ウィーン

医務室の扉が開き、
ルミアが入ってきた。

死んではいないし、
ましてや怪我もしていない。

ルミ

「ファントムさん！
起きて大丈夫ですか？」

ルミアが俺に駆け寄る。

いつものルミア……

ルミ

「心配しましたよ……
巫女様……じゃなくて、ミレイさんが船に運んで来てから起きないんですもん。」

て言っても、1日も経っていませんけ……
……キャ!……」

俺はルミアの話を無視して、抱き寄せた。

ルミ

「ファ、ファントムさん!?
どうしたんですか!？」

少し抵抗してきたが、
構わず抱きしめる。

ファ

「このまま……」

ルミ

「?」

ファ

「このままでいさしてくれ……」

……

……お願いだ……」

俺はより一層強く抱く。

ルミ

「わ、わかりました……
でも、もう少し力を緩めて下さい」

ファ

「すまない……」

力を緩める。

だが俺は、
抱きついたままだった。

ルミ

「どうしたのですか……?」

ファ

「何でもない……
……何でもないさ……」

ルミアの角度からはわからなかったが、

………

………

俺は涙を流していた。

—
—
—
—
—
—
—
—

ルミ

「落ち着きました？」

ファ

「ああ……」

ありがとう」

ベッドで上体を起こしていると、隣でイスに座っているルミアに尋ねられた。

夢で良かったと
切に思った。

ルミ

「さっきはどうしたんですか？」

ファ

「……いや……

何でもない」

ルミ

「何でもない事はないんじゃないですか……？
怖い夢を見たとか？」

君は超能力者か？

ルミ

「幽霊が出てきたんでしょ！？」

ハズレだ。

ファ

「……悪夢だ。」

夢って言うのはすぐ忘れるものだが……
鮮明に覚えてる」

しかし、2回目で良かったかもしれない……
マリが出てきた夢は現実感が無かった。

もし1回目があんなに現実感があつたら……

考えるだけで寒気がする。

ファ

「俺……」

どうなっていたんだ？」

ルミ

「シヌが運んで来た時にはぐったりしてました。
その後は、ミレイさんとシヌがビルに残りました」

ファ

「シヌ達は？」

ルミ

「ファントムさんが寝ている時に来ましたが……
ファントムさんを確認するとすぐ帰りました」

覚えていない……

……

……

意識があつたのは……

ゴールドって奴と会った時までか？

ファ

「被害はどの位だ？」

ルミ

「ガーディアンズ

32名死亡。

ビル内の一般人

172名行方不明。

……それと……

……

独房に居た

キログマ・チューザレ……

精神病院に入院した

裏カジノの生き残りの構成員……

……

2人共……

原因がわからないまま、死亡しました」

ファ

「原因がわからない？」

ルミ

「検死を行いました、死因が解明出来ないんです。病気にはなっていないのに突然……」

ファ

「突然死か……」

もしかしてウイルス？

いや、あり得ないな。

俺や接触した全てのヒトが感染して、死亡しているはずだ。

血液感染だろうか？

だが、ウイルスを作れる程の科学力があるなら、シヌ達は話しているだろう。

いや待て……

何故制裁者だと決めつけた？

ルミアが話したからと言うのもあるが、すぐに関係無いと気づくと思う。

俺は一方的に決めつけただけ？

だとしたら、良くないな……

悪は悪と決め、

善は善と決めつける。

視野を広くしないと……

ファ

「わかった。」

ありがとうな」

ルミ

「もう少しで迎えが到着すると連絡ありましたよ」

ファ

「何!？」

お迎えだと!？」

俺の寿命は無くなったのか……」

ルミ

「そっちじゃありません」

—
—
—
—
—
—
—
—

ガーディアンズ
テンマ保管室

シヌはバアルに呼ばれて、テンマ保管室まで訪れた。

シヌ
「これがテンマねえ……大きいな」

初代テンマを作ったシヌには、親近感があるのだろう。

シヌ
「で？」
何しに俺を？」

バアルはシヌに背を見せながら答える。

バア

「人通りが少ない廊下にある部屋。
僕達2人だけ。」

僕は武器を持っている。

「……少しはわかるんじゃないかい？」

(シヌ)

気づき始めたか……

シヌはわかったものの……

シヌ

「さあね。」

最初に言っておくが、
俺は男に興味は無い」

バア

「惚けないでほしい。

君とミレイさん、嘘言ってるだろ」

シヌ

「……ンフフ……」

リゼンはもう手遅れか……」

バア

「手遅れ？」

シヌ

「あの状態になれば、

君達ではどうにもならない」

バア

「第1人類って言うのは、君の世代なんだろう？

何故リゼンは自分をそう言った？」

（シヌ）

リゼンの奴……

余計な事言いやがって……

シヌ

「君が知る必要は無い。

1日2回はキツイが……

記憶を変えよう」

バア

「……いや、3回になるかもしれない」

シヌ

「何を……」

「……！！……」

咄嗟に前へ飛ぶ。

一拍遅れて、フォトン刃が残像を残した。

シヌ

「やれやれ……」

嫌われ者は大変だ」

ルシ

「お前はそういう役割だろ？」

持ち主と同じ名を持つセイバーを構えていたのは……
紛れもないルシフェルだった。

3章…1　〈真実を〉（前書き）

3章…0でとんでもない誤字がありました。
指摘してくれた
読者様……感謝です。

あるセリフで名前を間違っています。

バアル↓リゼン

早めに読んでしまった方には……
申し訳ありません……
もう1度読み返すと、
内容を納得出来ると思います。

お手数ですが、3章…0をもう1回読んでほしいです。

3章：1　〈真実を〉

リトルウイング私船

迎えはエミリアが来た。

ファントムはマリが来るとおもったが、聞いてみると仕事に出たようだ。

エミ

「体は大丈夫？」

ファ

「問題無い。」

怪我はしてなかったしな」

エミ

「だとしても心配するよ。」

突然意識が無くなったんだって？

逆に心配するから」

ファ

「ああ……」

初めての事だしな。

………

「そういえば、都市リノヨはどうなったんだ？」

エミ

「ガーディアンズで聞いてない？」

「まあ話す暇も無いかもね……」

「……事件の犯人を探すためにフル稼働中。」

「その大半は都市リノヨに派遣されてるんだって」

ファ

「ニュースで事件は放送されたか？」

エミ

「アタシがルミアから聞いた程は放送されてないね……
けどグラール中騒然って感じ」

ファ

「まあ大事件なだけはあるな……」

—
—
—
—
—
—
—
—

ガーディアンズ
テンマ保管室

攻撃してきたルシフェルに対して、シヌは聞いてみる。

シヌ

「いつ退院したんだ？
病み上がりは寝てた方が身のためだ」

ルシ

「バアルが見舞いに来た時には起きてた。
話を聞いて寝られなくなった。

俺は弟と違って、
まだ

お前を許していない」

シヌ

「怖い怖い……」

……グラールが滅亡するのに、俺みたいな小物を相手にするのか？」

バア

「それは君から真実を聞いてからだ」

バアルは

カノン・クオリアで銃撃する。

しかしフォトン弾なので、避ける。

シヌ

「真実？」

それは君達が決める事ではない」

ルシ

「お前が決める事でもない」

シヌ

「そうだな……」

人間になった俺には決められない。

しかし、真実を決める存在は実在する」

バア

「何が言いたいのかわからないな」

シヌ

「つまり……」

君達にとっての真実は、真実であり虚実でもある。

……果たして俺が話す真実は本当に真実か？
それとも虚実か？

知ったところで君達は信じないだろうし、また聞き返してくるだろう。

……………

なら最初から聞くな。

聞き返してくる真実を知っている俺は、答えない」

ルシ

「力づく…か……」

ルシフェルはセルスティアブレイドを構える。

バア

「僕も加勢する」

バアルは

エッジ・クオリアにする。

(シヌ)

どうしたものか……

神の存在を話せば、

この次元バランスが崩れて存在が無かった事になる……
かと言って、納得出来る話なんて持っていない。
記憶を書き換えても1人が限界……

……..
話を逸らしてみるか……

シヌ

「バアル君はガーディアンズの仕事をしなくて良いのか？」

バア

「今工作中だ。」

裏の仕事。

黒歴史、テンマの破壊。

シヌ君をここに呼んだのは、真実を話さなかった時に君のせいにし
ようと思ってね。

ナイスタイミングだったよ。

……..

ガーディアンズはテンマの処分法に困って……

誰かに破壊されたなら、非人道的実験の証拠を木っ端微塵にしても
構わない。

グラール中から追われなくなったら、話した方が良い」

(シヌ)

仕事を受けてる時にリゼンの話を聞いて、ガーディアンズで破壊工
作した容疑で追われたくないなら、その真実を話せと……

……..

嫌な奴……

シヌ

「ルシフェル君は
ファントム君に会いに行かないのか？」

ルシ

「お前から話を聞いたら行く」

(シヌ)

早く行けよ……
全く、空気読め。

シヌ

「じゃあこうしよう。
戦って俺が負けたら、
洗いざらい話そう。
逆に俺が勝ったら、
2度と話を聞こうとするな」

ルシ

「良いだろう」

ルシフェルはバアルに
アイコンタクトで確認する。
賛成のようだ。

シヌ

「先手必勝！」

ルシフェルに間合いを詰める。

黒餓は出さずに格闘で戦う。

武器が無い為、ルシフェルよりも早く動ける。

ルシフェルは避けているものの、かなり辛そうだ。

すると、シヌの後ろからバアルが
エッジクオリアを振る。

シヌ

「見え見えだな」

後ろを見ていないのに、バアルの攻撃がわかったシヌ。

上体を後ろへ逸らして避ける。
そのまま床に手をつき、カポエラで2人を攻撃する。

ルシ「チッ……」
バア「グッ……」

ガードしたが、手が一瞬だけ痺れる。
それをシヌは逃さなかった。

逆立ちの状態から跳ね上がり、ルシフェルを踏み倒す。
次は回って助走を付け、バアルの頬に裏拳をヒットさせた。
バアルは倒れてしまう。

シヌ

「俺は人間だが、君達と違ってLV250だ。
200で止まって、

“人口的転生”でしか強くなれない君達とは強さに違いがある」

ルシ

「クソ……!」

バア

「……良いのかい？」

君は逃げ場を無くすぞ？」

シヌ

「別に良い。

それよりも、君はそんなマネ出来るのか？

俺が察するに……

君はそんな汚い事はしない人間だと思うが？」

バア

「……………」

シヌ

「最近思うようになったが……

人間の優しさってのは嫌いじゃない。

……………」

……………」

うわ、何を言ってるんだ俺？

……………帰る」

早足で部屋を出ていってしまった。

2人は立ち上がった。

バア

「……………」

ルシ

「……………」

で？ テンマはどうするんだ？」

バア

「そっち！？」

……………」

まあ、コネを使ってどうにかするよ」

ルシフェルを見て言った。

ルシ

「ローグスか？」

秘密裏なら出来なくはないがな……

……………」

……………」

……………」

どうする？」

今度は真面目だった。

バア

「ミレイさんに聞いても答えないだろう……
今は聞かずに、待ってみよう」

ルシ

「呑気だな」

明らかに納得していない顔だったが……
仕方なくバアルの言った事を飲み込むしかなかった。

—
—
—
—
—
—
—
—

地獄 主軸系

魔神塔

堕天使の間。

コン、コン……

悪魔

「ルシフェル様。
いらっしゃいますか？」

黒山羊が二足歩行しているような悪魔が、扉をノックして確認をする。

しかし、返事が無い。

悪魔

「入りますよ」

部屋に入ると……

堕天使がこたつに入って、P＊Pをしていた。
ジャージの上に

ちゃんちゃんこを着ている。

悪魔

「ルシフェル様。

先ほどファントムから連絡が入り、転……

………

聞いてますか？」

よく見ると、イヤホンを付けている。

悪魔

「ルシフェル様！

聞いていますか！？」

堕ル

「うるせーよ！！

今FF＊式のエンディング見てんだよ！

泣けんだぞ！ 歌とムービーがスゲーあってるんだよ！」

悪魔

「そうですか！

ファントムが転生に失敗したらしいですよ！！

ハイ！ 伝えました！」

バン！

悪魔は扉を勢い良く閉めて出ていった。

堕ル

「……………」

……失敗か……

ファントム君の性格的に、残り制裁者11人と会っても完全に転生しないかもしれないな……

……………」

……………」

そうだ……

良いこと思いついた……」

堕天使は不気味笑うとゲームを仕舞い、携帯を取り出した。

アドレス帳から、
ファントムを選んだ。

3章：1　〈真実を〉（後書き）

久しぶりに地獄が出てきた。

3章::2 ｝cord“輪廻”｝(前書き)

インド神話に

破壊、維持、再生

って、ありますよね……

若干入ってます。

3章::2　　\ cord “輪廻”　　\

3日後……

3日経った現在でも、依然としてガーディアンズは組織を追っている。

事件のすぐ後に組織的犯罪だと公表……勿論、制裁者の話は伏せてある。

この3日間はファントムもガーディアンズに協力していた。
依頼としてだが。

3日前の事件で全く力にならなかったのも、自らは志願しなかった。
つまり、腕を買われて協力したという形になる。
全く手がかりは掴めなかったが……

クラッド6

リトルウイング

居住区

ファントム自室

部屋にあるイスに

ファントムとルシフェルが座っている。

ファ

「いつ退院したんだ？」

どうやら、ルシフェルは今さっき来たようだ。

ルシ

「お前達が都市リシヨで捜査してた時」

雰囲気的に張り詰める……

ファ

「兄弟が会うのに理由は無いが……
今日はどうしたんだ？」

ルシ

「……バアルが現状を教えてくれた。
お前、やっぱりシヌを許してたんだな」

ファ

「許したわけじゃない、信じれる価値があると思っているだけだ」

ルシ

「……………」

「……まあ、個人の意見か……
それは否定しても意味が無い。
俺が聞きたいのは……
……………」

聞きづらいのか、黙ってしまった。

ファ

「何を聞きたいんだ？」

ルシ

「……………」

詮無き疑いだが……

……お前……

シヌに何か聞いたか？」

ファ

「どういう意味だ？」

ルシ

「俺……いや……俺達。

バアルと俺は、

シヌとミレイの話を疑念を抱いている。

そしてシヌを力づくで問い詰めた。

……だが負けた。

ミレイに対しても考えたが、ミレイは強いと聞いた。

バアルは実際には見ていないようだが、相当強いらしい」

ファ

「それで俺か？」

悪いが、何も聞いていない」

ルシフェルは

疑いの眼差しを向けた。

隠す気は全く無い様だ。

ルシ

「お前位なら嘘を見抜けるんだぞ」

マリの様に読心術は使えないが、嘘は見抜くなら造作もない。

因みにマリは

読心術を自重しているので、ファントムは最近心を読まれていない。

ファ

「……………」

ルシ

「……………これ以上は平行線だな。

俺は俺で動いている。

バアルは責めてやらないでくれ」

そう言い残すと帰ってしまった。

ファ

「……………」

何とも複雑な気分になるファントム。
ふと、シヌの言った事を思い出す。

仲間思いに犠牲は付き物。
君の場合……心。

ファ

「この事……なのか？」

—
—
—
—
—
—
—

リトルウィング事務所

ルシフェルが帰った後、クラウチに呼ばれたファントム。

仕事が入ったそうだが……

ファ

「シズルが行方不明？」

依頼者はナツメ・シュウ
仕事内容はシズルの搜索だった。

ナツ

「シズルは貴方達と親交があったので、是非頼みたいのです」

クラ

「ガーディアンズに頼めないのもあるんだがな」

当然だろう。

今ガーディアンズは

3日前の事件で動きっぱなしだ。

ファントムは依頼書に目を通す。

ファ

「最後に確認されたのは……………」

依頼書には

モトウブ

E W O N O 地点

いわゆる、北極点。

ファ

「何故こんなところに？」

ナツ

「シズルはミカさんと、ある研究をしていました……

……………」

…… “転生理論” ……

……………」

しかし研究は難航し凍結。

何故なら……

……旧文明で使われた高度な精神技術が難解……
さらに

cord“輪廻”

transmigration of souls

も非常に困難だからです。

しかしシズルは諦めず、“転生理論”解明の突破口と考えた……

EWO NO地点

“輪廻破壊の地”

に向かったのです」

(ファ)

………

うーん……

情報量が多い。

クラ

「何の研究なんだ？」

ナツ

「シズルは亜空間事件を自体験を元に、ヒトの転生について研究し
始めました。

簡単に体に乗っ取られた理由を

前世、現世、来世。

輪廻転生に関係があると考えたのです」

(ファ)

科学者だな。

自体験があるという事もあるが……
明確な理由無しで研究するとは……

ファ

「cord “輪廻”

transmigration of souls
ってのは何なんだ？」

ナツ

「人工的に転生を起こす計画……」

ファ

「そんなバカな。

前世、来世がある前提の話じゃないか」

ナツ

「私もよく知らないくてね……

3日前に突然提案したんです」

ファ

「3日前……？」

(丁度あの事件の時か……)

……

.....

“輪廻破壊の地”とは何なんだ？」

ナツ

「モトウブ北極点にある謎の遺跡。

旧文明よりも前に建築された遺跡です。

あまり知名度はありませんがね……

……この他にも、

ニューデイズ北極点に

“輪廻維持の地”

パルム北極点に

“輪廻再生の地”

があります」

(ファ)

聞いた事が無いな……

旧文明の時にも聞いた事が無い。

クラ

「ま、連れ帰った時に聞いて見れば良いだろう？」

ファ

「.....」

……そうだな。

さっさと見つけよう」

ナツ

「よろしくお願いします」

(ファ)

3惑星に1つずつの遺跡……

全て“輪廻転生”が関係している……

知名度が無い……

……

……

勘かな……

嫌な予感がする……

3章：2　cord“輪廻”　（後書き）

シズルは自分がカムハーンに乗っ取られた事を元に、ミカと旧文明の精神技術を研究してたが、難航して凍結。

その後……

独自の研究を続け、3日前に突然

cord“輪廻”

transmigration of souls

（TMGOS、トムゴス）

を発案。

グラールで行われている人工的転生とは違い、前世の自分を転生させる計画。

計画はほぼ謎のまま……

シズルは“輪廻破壊の地”と呼ばれる場所へ向かい、シグナルが途絶えた……

パルムには

“輪廻再生の地”

モトウブには

“輪廻破壊の地”

ニューデイズには

“ 輪廻維持の地 ”

知名度は全くと言って良い程無く、旧文明よりも昔の遺跡としかわからない。

3章：3　（悪夢・終）

リトルウイング

俺はエミリアと共に、
ナギサと対峙していた。

回りはリトルウイング社員が何人も倒れている……

欠片事件時……

ナギサが俺達に刃を向けた……

下手くそな演技だったが……

俺は冷静ではいられなかった。

刃は向けなかったが……

俺は……

ナギサを殺してやりたかった……

ナギ

「……遅かったな」

ナギサが俺達に言った。

エミ

「ナギサ……？」

「……え……どうして、みんなが倒れてるの？」

ナギ

「愚問だ。」

私が倒したからに決まっているだろう」

ファ

「どういうつもりだ……」

返答次第じゃ殺すぞ」

ナギ

「説明しなければわからないか？」

私が武器を持ち、皆が倒れ伏すこの状況を見てなお説明が必要なほど、貴方は馬鹿では無いはずだ」

手が出そうになった。

すぐにサンゲを取り出し、ナギサの細い体を斬り刻みたかった。だが、エミリアがいるこの場でそんな事は出来ない。

冷静を装い、理由を問う。

ナギ

「何故と聞かれても困るな。

強いて理由を挙げるのならば貴方が強いから、だろうな」

意味がわからないな。

このまま明確な理由を聞かずに殺そうか？

ファ

「いつから考えていた」

ナギ

「最初からだ。

私は最初から、このつもりで動いていた。
貴方と刃を交えた、その時からだ」

ファ

「GRM社の時か……

……で？……

なぜ、今になって」

ファ

「……くどい！

すでに話すことは無いはずだ！

何を聞かれても、私は翻弄しない！

武器を取れ、ファントム！

私は大罪人で、貴方は断罪者だ！

ならばその刃で、私の命を刈り取ってみせろ！」

何だか……

下らねえな……

良く見たら皆生きているし……

演技バレバレだな……

ファ

「何故君の言う事聞かないといけない？

俺は女の子を殺す程クズじゃない。

……

……そうだな……

俺をその気にさせてみる」

ナギ

「くっ……」

ならば、次はエミリアを狙うぞ！」

ファ

「!!」

ナギ

「貴方はこれ以上、被害を大きくしたいのか！
いい加減、聞き分ける！
この頑固者め！」

エミリアを狙う？

殺す……？

殺すって言いたいのか？

ナギ

「私と戦え！」

そして殺してみせろ！

それで、全てが終わる……

全部、なにかもが終わるんだ!!」

ファ

「今何て言った？」

ナギ

「……何だと？」

ファ

「今何て言ったって聞いてんだよ……！」

自分でも驚く位に声が出た。

ファ

「エミリアを狙う？」

ハッ！

良いぜ……！！

俺をその気にさせる理由だ！

せいぜい即死出来る位に死んで見せろ……！！」

たった一步でナギサまで間合いを詰める。
サングを片手に攻撃する。

ナギサがステイルルハーツで防御した。

ファ

「意味ねえよ！」

最初の一撃を下から当てる……

それだけでステイルルハーツを弾き飛ばし……

二撃目を上から斬り込む……

胴体を斬った……

真っ赤な血が俺にかかる。

違う……！

あの時……

俺は、正気に戻って力を緩めた。

すぐに武器を仕舞って、回避行動を続けていたんだ……！

俺はナギサを傷付けていない！

ナギ

「っ……ぐっ……！」

まだだ……私はこの程度では死なない……」

俺はまた刀を振り上げた。

ダメだ……やめろ！

体に逆らい、動きを止めた。

ナギ

「だが……そうか……」

貴方も、私を殺せないか……

甘いヒトだ、貴方たちは………

………

……ならば私は、全てを奪うぞ！

まずは、エミリア！

貴方からだ！」

動けええええええええええ！！！！

「……！」

一瞬俺を見て……

ナギ

!?

337

何故止めなかった？
今の殺気は気づけ……
うぐっ……」

何も言わずにサングを胸に突き立てた。

ナギ

「……そうだ、それでいいんだ。
やっと、きちんと、狙ってくれたな……

……

……これで……いい

……

これでグラールは……大丈夫……ぐっ！！」

俺は刀を一度引き、
上下逆にして刺した。

ファ

「結局人間とはこんなものか……
何故私が、こんな”ゴミ”に希望を見いだしていたのだろうか……
ああ、下らねえ」

勝手に口が……！

俺はナギサの喉元まで斬る。

ナギ

「オエツ……

ゲホッ……

……

……」

嗚咽を漏らし、死んだ。

ワイ

「ナギサ……ちゃん……」

ファントム君！

何故ここまで……」

ファ

「何故？

意味なんか無い。

殺したいから殺す。

汚くしたいから汚くする。

………

俺には“何故？”と聞く方が“何故？”と聞きたい……
………消えろ」

ワイ

「！？」

ワイナールが消えてしまった。

ファ

「さて……

あとはダークファルスか……」

俺はナギサの体からダークファルスの欠片を取り出した。

ファ

「……憎い……！」

ゼロが作ったダークファルス！

私の新たな世界が誕生するはずだったのに……！」

欠片を手で潰した……

俺の体をヨリシロをせずに……

どうなってる……

こんな馬鹿な……

フ
ア

「本当に下らねえ……」

“今の” ナギサは“ゴミ”を助ける為に死のうとしたのか……？

.....

フ
ハ
ハ
ハ
⋮
⋮
⋮

[illegible][illegible][illegible]

…下らねえ！！

下らな過ぎなんだよ！！

そんな物守って何になるんだよ！！

ウゼエんだよ!!!

ああ……！

吐き気がする！

貴様にとってこれは
バットエンドだろう！

だが私にとっては
トルソーエンドだ！」

誰に喋っている？

今喋れる奴なんて……

ファ

「貴様だファントム！」

俺に話している？

フア

「そうだ！

頭の良い貴様ならわかると思ったがな！」

わかる？
何が？

ファ

「私の存在にだ！

何故今まで悪夢を見てたかわからないのか？

少しずつ私が近づいて行ったのに……！

あんな悪夢を普通見るわけがないだろ！

わからしてやるよ！

私の同胞がいずれな！」

サンゲを体に突き立てる。

ファ

「さあ悪夢は終わりだ！

次は正夢になるだろう！

その時貴様は……

私の体だ！」

3章：4 転生の時

モトゥブ

E 6
N 178

？

「……………トム……………」

ファ……………ト……………ム

……………

ファントム……………！」

ファントムが目を覚ますと、ナギサが呼びかけていた。

イスで寝ていたようだ。

ファ

「……ナギサ……!?!」

ナギ

「もうすぐで目的地だ。
準備するぞ」

ファ

「あ……ああ……」

(ファ)

……また、夢か……

だが……

前の夢とは違った……

目を擦り、船内を確認した。

ナギサは防寒具を用意している。

エミリアは船を操縦している。

この仕事はファントムを合わせて3人だ。

エミ

「ファントム」

お父さんと連絡を取って」

ファ

「……ああ、わかった」

通信機を起動させ、クラウドに繋ぐ。

ファ

「こちらファントム。

予定通りEWO NO地点へ向かっている。
到着時間は……

15時30分頃」

（クラ）

「OK。

15時13分現在、確認」

定期連絡を済ますと通信を終了した。

ファ

「エミリア……ナギサ……シズル……俺……

（俺達に自覚は無いが……制裁者のメンバー……
なんだよな……）」

（ファ）

嫌な予感的中しなければ良いが……

—
—
—
—
—
—
—
—

船内

E W O N O 地点
“輪廻破壊の地”

遺跡は円形状。

それほど小さくなく、走って30秒程で回れるだろう。

船を入口と思われる場所に停めた。

ファントムとエミリアは、ナギサから大きなコートを受け取る。

エミ

「うわぁ、暖かそう」

エミリアがコートを着てみる。
足まで隠れている。

ファントムも着てみると、足まで隠れた。

大きさは個々のサイズを揃えたようだ。

ナギ

「さて、行こうか」

いつの間にやらナギサも着替えている。

エミ

「じゃあ開けるね」

船の扉が開く。

幸いな事にホワイトアウトは発生しておらず、風も強くない。
しかし、寒さは異常だ。

ファ

「寒いが……」

このコートのお陰で、和らげてるみたいだ」

エミ

「胡散臭いな」

って思ってたんだけどね。

何せお父さんが用意した物だし」

その胡散臭いコートのお陰で、近いと言ってもすぐに入口に着く。

遺跡の材質は岩で出来ているようだ……

ファ

「開けるぞ」

重い岩の扉を開けた。
中は真っ暗だ。

ナギ

「ん？ 暖かい？」

扉の奥から暖かい風が吹いてきた。

ファ

「誰かいるみたいだな。
シズルだと良いが……」

ライトを照らし、奥へ進む。

—
—
—
—
—
—
—

“輪廻破壊の地”
遺跡内

奥まで進むと、部屋は外見と同じで円形状だった。
真ん中に、文字が刻まれている腰位の高さの、円形の石柱がある。

エミ

「シズルは……いないみたいね……」

真っ暗な部屋を明かりで180度確認するが、シズルは居ない。
ましてや、部屋の暖かさの原因もわからない。

ファ

「どうなってるんだ？」

エミ

「わかんない……」

てか、コート要らなくない？」

コートをトランサーに仕舞い、いつもの服に戻る。

ナギ

「何故こんなに暖かいんだ？」

ファ

「わからないが……」

雪で作るかまくらみたいな物じゃないか？」

エミ

「かまくら？」

ファ

「……あ…そうか……

今の時代は無いのか。

旧文明の時に雪が降ったら作るんだ。

ニューデイズの北の方で知られている」

話しながら真ん中の石柱へ近づく。

側面に何か書いてある。

ナギ

「何なんだそれは？」

ファ

「……文字が書いてあるが……

……読めないな」

エミ

「どれどれ……

……

うん……読めない」

ファントムとエミリアが見てもわからない文字。

カーシュ族の時のように、ある程度読めるヒトがいたら違うだろう

……

ナギ

「これは何だ？」

今度は上を指した。

ダイヤルのような物が付いている。

ファ

「円形ばかりだな……
これ、回せるのか？」

ダイヤルに手を置く。
動かせるみたいだ。

エミ

「だ…大丈夫なの？」

ファ

「わからない」

ナギ

「なっ!？」

フア

「大丈夫だ。

絶対守ってやる」

その言葉を聞いて安心したのか、大人しくなった。

フア

「いくぞ」

とりあえず180度回してみた。

ガコン！

突起していたダイヤルが石柱に隠れていった。

見えなくなると……
壁のある一面が開いた。
同時に部屋が明るくなる。

エミ「!!」
ナギ「!!」

ファ
「どんな仕掛けだよ」

明かりは天井の球体から発せられている。

ファ
「……何故、知名度が無いんだ？
ここに来たヒトは、この仕掛けに気づけなかったわけはないだろう
……」

エミ
「だよね……
単純過ぎる……」

ゆっくり考察していると、ナギサが開いた壁へ向かった。

ナギ

「こっちに来てくれ！
階段があるぞ……！」

壁の中は踊り場で、下に続く階段がある。
明るい……

ファ

「シズルは下か？」

ファントム達は下へ下っていく……

随分と深いようだ。

— — — — —

“輪廻破壊の地”

最下層

下へ下へ向かっていくに連れて、岩で出来た壁が無くなっていく……
最下層では機械的な部屋が広がっていた。

部屋の真ん中に背を向けるシズルが居る。

ファ

「……シズル！」

おい、大丈夫か？」

ファントム達に気付いたみたいで、ゆっくりと振り返る。

シズ

「……そうか……」

父さんがリトルウィングに依頼したのか……」

エミ

「帰るよシズル」

ナギ

「皆心配しているぞ」

シズルが不敵に笑う。

シズ

「ククク……」

そうか……

後は君達だけか……」

エミ

「？ 何言ってるの？」

(ファ)

コイツ……シズルなのか？

……

俺の後ろに誰がいる……

ファ

「ナギサ……」

ナギ

「ああ、わかってる」

シズ

「フン……」

後ろに居るのがわかったようだな」

ファ

「お前誰だ？」

カムハーンじゃないだろ」

シズ

「そうだな。

カムハーンは既にこの次元にはいない」

エミ

「どういう事？」

シズル……誰かに操られているの？」

シズ

「操られている？」

……まあ、近いところだな。

君達も僕みたいになる」

後ろの気配が動く。

ファ

「ナギサ！ エミリアを頼む！」

サンゲを取り出し、後ろに居た存在と刃を交える。

胃不魔・豪飢がリーガルランサーで攻撃する。

ゴウ

「この時代ではお初にお目にかかる！」

胃不魔・豪飢と申す！

我が主に相応しい存在か、試さしてもらう！」

ファ

「エミリア、ナギサ。

早く逃げろ！」

エミ

「アタシ達も……」

ファ

「ダメだ!!」

早く行け!!」

ナギ

「……彼なら大丈夫だ。
戻ってくる」

エミ

「……………」

……………」

……わかつ……たわ……」

走って階段へ向かう。

シズルは追いかけない。

シズ

「ここは野放しにした方が良いか……」

……………」

さて、あとはファントム君だけだな」

部屋に

アンナ

ロドリゴ

リゼン

アルベルト

ゴールド

カザリ

シェリー

制裁者が現れる。

ファ

「！！」

何も無い場所から突然現れたので、驚く。

リゼ

「……ステルス迷彩としては失敗ですね。
気分が悪くなります」

アン

「自分で作っておいて何言っただよ。
お前の7…3分けを0…0分けにするぞ」

ロド

「おうリゼンの坊主。
これ買った」

シェ

「うゝん……」

アタシの中身で誤作動が起こっている……」

アル

「大丈夫ですか？」

ゴー

「心配症か？」

カザ

「ゴウキさん！

そろそろ止めてください！」

ゴウ

「む……」

そうだな……」

ゴウキはリーガルランサーを仕舞う。

シズ

「エミリアとナギサはいないが……
これでファントム君は……」

[illegible]

3章::4 〽転生の時〽 (後書き)

そろそろ急展開が!?

3章：終　く仲良しく（前書き）

誤字を指摘されたので、訂正しました。

指摘してくれた読者様、ありがとうございます。

3章：終　　く仲良し　　く

モトウブ

E W O N O

“ 輪廻破壊の地 ”

最下層

(フア)

攻撃してこない？

どういう事だ……？

ゴウ

「む……！」

思い出した！

1年前に我輩は主に倒されました！

それなのに試すという愚行をお許し下さい！

主が望むなら、腹を斬ります！」

(ファ)

コイツ熱いな……

……

1年前……？

誰だ？ コイツ……

カザ

「……ゴウキさんを覚えていないのですか？

まあ素顔は知りませんよね……

クリンサ街のOFMですよ」

ファ

「確か、カザリだったな……

どういう意味だ？」

ゴー

「そのままの意味だ。

アルーの力で生き返った」

アル

「久しぶりだね。

ファントム君」

(ファ)

(ゾッ) 何だコイツ……！

周りの奴らと全然違う！

言葉に何も感じない……

ロド

「なんじゃ？」

アル坊に怖じ気付いてるぞ」

シズ

「まあ待って下さい。

転生しかけてるのかもしれない」

リゼ

「違いますね。

かなりビクついてます」

シェリー

「ファントムさん！

ファントムさん！

今の顔写メ撮っちゃった！」

(ファ)

何なんだコイツら……

会った事無い奴が仲良く接してくる……

顔見知りもいるが、敵のはずだ。

シズルだけしか知らねえ……

まるで友人と再開したかのようにファントムに接する。

しかし、アンナだけが納得した顔をしていない。

アン

「アンタら、勘違いしていない？」

転生していないファントム様とは他人なんだよ」

全員

「あ、そうか」

(ファ)
何なんだ……？

カザ

「てことで……
さっさと転生して下さい！」

カザリはファントムに走って向かう。

ファ

「結局戦闘かよ！？」

サンゲを取り出し、カザリの攻撃に合わせて振る。

しかし、ロドリゴの
コマンドブレイザーがサンゲを弾き飛ばす。

ファ

「チッ！」

(ファ)

カザリを防げないか!?

ポント

カザリは攻撃せず……
ファントムの肩に手を置いた。

ファ

「……え？」

カザ

「……!?!?……」

これ……!」

すぐに肩から手を離し、距離を取った。

アル

「どうしました?」

カザ

「シヌっす……!」

触った瞬間にAフォトンが入ってきた……

無理矢理、転生を解除しようとしやがった!」

アル

「シヌさんか……」

いつ細工したんだか……」

ファ

「お前達……」

どういう事なんだ……」

アル

「……………」

説明しても良いんじゃないですか?」

アルベルトはシズルに聞いてみた。

シズ

「そうだな……」

長い長い説明になりそうだ……」

—
—
—
—
—
—
—
—

ファントムが説明を聞き終わった頃……

“輪廻破壊の地”

入口付近

船内

いつでも出発出来るように、船のエンジンをつける。

エミ

「大丈夫かな……
ファントム……」

ナギ

「私達を逃がしたという事は、私達では敵わないと思ったからだ。
応援しよう」

(ファ)

「ダメだ！」

通信機からファントムの声が響いてきた。

エミ

「ファントム！？」

(ファ)

「君達はリトルウイングに戻れ！
マリと会って……」

“制裁者が来る”と伝えろ！」

ナギ

「どういう意味だ!?!」

(ファ)

「話している暇は無い!
さっさと行け!

.....

.....

それと.....

.....

俺が帰る事は無い」

エミ

「何言って.....

(ファ)

「もし帰っても.....その時は.....

.....

.....俺を殺せ.....」

通信はそこで途切れてしまった。

エミ

「ファントム?
ファントム!」

ナギ

「やっぱり戻ろう。
放って置けない」

エミ

「うん！」

エミリアが扉の閉開ボタンを押す。

しかし、開かない。

ナギ

「どうなってるんだ！」

—
—
—
—
—
—
—
—

船外 扉前

アルベルトが閉じた鉄扇で扉を叩く。

アル

「「真実」として、扉は開かない」

—
—
—
—
—
—
—
—

船内

開かない扉の前で成す術が無い、ナギサ。

エミ

「何で開かないのよ!」

ナギ

「こうなったら……」

エミ

「壊したらダメ!

寒いまま飛ぶ事になるよ」

ナギ

「じゃあどうすれば良い!?!」

エミ

「一度リトルウィングに戻ってマリに話を聞いてみよう!

“制裁者が来る”、何か意味があるはず」

ナギ

「……戻ったら私はすぐに助けに行く」

エミ

「わかってるわよ!」

船は上昇していき、全速力で飛んでいった。

—
—
—
—
—
—
—
—

“輪廻破壊の地” 外

船が飛んでいったのを見届けたアルベルト。

アル

「エミリアさんとナギサさん……

本当に今のファントム君と仲が良いみたいです……

……

綺麗な事だと思いますよ」

独り言を口走ると、遺跡の中へ入っていった。

3章：終　　く仲良し　　く（後書き）

次回は、

シズルの説明から。

制裁者の秘密が明らかに？

4章：0 命消えるまで（前書き）

1つ前に誤字がありました。

指摘してくれた読者様、

ありがとうございます。

アルベルトとはシズルに問う。

「と」が1個多い……

4章：0 命消えるまで

モトゥブ

EWO NO

“輪廻破壊の地”

最下層

シズルが説明すると言うが……

ファ

「聞く気は無い。」

さっさとシズルから出ていけ」

シズ制

「出ていく…か……」

アル制

「やはり説明が必要ですね。」

根本から僕達を理解していない」

アルベルトは階段へ行こうとする。

ファ

「待て。」

行かせるわけにはいかない」

M92Fを取り出し、アルベルトに向ける。

しかし、ロドリゴがファントムにコマンドブレイザーを向けた。

仕方無くM92Fを手放す。

アル制

「ありがとうございます。」

お礼にリゼンさんのステルス迷彩を買ってあげます」

そう言い残すと、階段を登っていった。

シズ制

「大丈夫ですよ。」

エミリア達には手を出しません」

ファ

「保証はあるのか？」

シズ制

「彼女達是我々の仲間ですよ？

手は出しません。」

まあ今は仲間ではありませんから、まだ仲間にならない方が良い……
が、正確な言い方ですね」

ファ

「敬語を止めろ。」

気色悪い」

シズ制

「……すぐに違和感が無くなりますよ。
転生すればすぐ」

シズルは説明を始めた。

シズ制

「神……」

その存在は知ってますね？」

ファ

「！……」

何故お前が……

シズ制

「既にシヌと会っているなら気づいているんじゃないんですか？
12人の制裁者。」

ファントム君や私達の存在に……」

ファ

「……」

……

あくまでも可能性だ……

……

俺や、エミリアとナギサはまだのようだが……

お前達は

“ 神病感染者が転生 ” した……

と言う事だろう……」

シズ制

「……正解です。

私達は条件が揃った事により、この時代に蘇った神病感染者」

ファ

「……目的は名の通り制裁か？」

シズ制

「そうですが……

目的はファントム君が決めるんですよ。

私達のリーダーだったのですから」

ファ

「つまり……

俺の“ 前世 ” がお前達の知っているファントムで、リーダーだった
と言う事か……」

シズルは微笑むと、違う話を始める。

シズ制

「……かつてここ……」

輪廻破壊の地は第1人類よりも昔に作られました。

勿論他の惑星にある

輪廻維持の地、輪廻再生の地もです。

……破壊、維持、再生。

堕天使から聞かされましたが……

全ての次元の始まりは神が始めるそうです。

……そしてサイクルを作る……

始まった次元を維持……

価値が無くなった次元を破壊……

価値が戻った次元を再生……

次元によって形は様々ですが、グラールはこういう遺跡なんです」

ファ

「何故知名度が無いんだ？」

ここまで不可思議な遺跡なら……

シズ制

「誰も入れないからです。」

あのダイヤルは、転生しかけている人間でしか反応しないんです」

ファ

「神はわざわざそんな面倒な事を？」

シズ制

「いえ、元々ここはサイクルを起こす為でしかありません。
こんな地下を作ったのは、私達制裁者……

……目的は……

……その話はまた今度」

ファ

「ふざけんな……！」

説明すると言うから聞いてんだぞ」

シズ制

「すみませんが、シヌに聞いてみて下さい。
彼も神を憎んだ人間なんですから」

ファ

「シヌ……

そう言えばアイツも神病感染者だ……」

シズ制

「制裁者ではありませんがね。

彼なら知ってますよ。

………

もつとも……

今のファントム君が聞きに行く事はありませんが……」

シズルが右手を上げた。

アン制

「ジベット！」

ファントムの足元に魔方陣が現れる。

ファ

「!？」

すぐに後ろへ避ける。

次の瞬間、

地球で知られている拘束具が出現した。

アン制

「さすがはファントム様の器。
避ける事位簡単よね」

ファ

「チッ……まあ良い。
長話には飽きてた。
戦うとするか」

銃と刀を拾う。

M92Fは仕舞い、ヤシヤを構える。

サングヤシヤとして構える。

シズ制

「では最後に……」

……ファントム君はシヌに気に入られているみたいですね……
転生しないようにAフォトンを精神に張っていたようですが……
……

無駄な事ですよ。

……正気を保っていますが、そろそろ……」

ファ

「何だと……？」

シェリー制

「イクヨー！！」

シェリーが

ハートオブデイスピアで攻撃する。

ファントムは避けるが、床が異常に抉れた。

ファ

「サンゲヤシャである以上、避けるのは簡単だな……」

シズ制

「なら攻撃は？」

ファ

「そうだな……」

お前達は斬っても死なないんだろ？
問題無さそうだ」

次の攻撃動作を行うシェリー。
その攻撃をサンゲで受け止める。

シェリー制
「ありや？」

ファ
「ハッ！」

ヤシャで突いた。

しかし……
体が動かない。

ファ

「……なに……？」

シェリー制

「効き始めたみたい」

嬉々とした顔でファントムから遠退いた。

(ファ)

動かなかった……
攻撃しようとしたのに……

シズ制

「シズのAフォトンも、制裁者が9人も居れば弱いもの……私達を仲間だと認識しているんです」

ファ

「……………」

……………」

シズ制

「絶句ですか？」

ファ

「……………」

ファントムは通信機を起動させる。

地上の船に繋がると、エミリアとナギサの声が聞こえてきた。

(エミ)

「ファントム……
大丈夫かな……」

(ナギ)

「私達を逃がしたという事は、私達では敵わないという事だ。
応援を呼ぼう」

ファ

「ダメだ！」

(エミ)

「ファントム!？」

ファ

「君達はリトルウイングに戻れ！
マリーに会って……

“制裁者が来た”と伝えろ！」

(ナギ)

「どういう意味だ!？」

ファ

「話している暇は無い！
さっさと行け！

……

……

それと……

……

俺が帰る事は無い」

(エミ)

「何言って……」

ファ

「もし帰っても……その時は……」

……

……俺を殺せ……」

ファントムは通信機を閉じた。

シズ制

「頭の良い判断……」

……五分五分ですね……」

彼女達を帰還させるには直接的な言葉で良いですが、そのまま帰るとは考えられません。

さらに、私達は彼女達に帰ってもらっても良いんですよ」

ファ

「……………」

シズ制

「自分に限界来ているから、
殺せ…と言った……
楽になったらどうです？」

ファ

「……………」

悪いが……

俺はまだ、諦めるつもりは無い」

シズ制

「？」

ファ

「お前達が操られているのはわかるが……
……仲間の為に死んでもらう」

サンゲヤシャを仕舞い、剣影をトランスする。

ファ

「どうせ死ぬ命なら……
最後まで仲間の為に使う……！」

お前達の好きにはさせない」

鞘から刀を抜き……

宿っているAフォトンを放出した。

—
—
—
—
—
—
—
—

2分後……

階段を降りるアルベルト。
最下層に到達する……

アル制

「……………」
結構な惨劇ですが……
転生しましたね」

血の付いた刃を舐めとり、鞘に仕舞った。

ファ制

「まだ抵抗しているがな。
……しぶとい奴だ」

ファントム以外に立っていたのは、
ロドリゴ、カザリ、シェリーだった。

シズル、リゼン、ゴウキ、ゴールド、アンナは意識はあるものの、
体の一部がどこかわからない。

ファ制

「私との一体化を振り切って同胞達を攻撃した……
とてつもない信念だな」

アル

「ファントムさんだってそうでしょう。

………

さて……

貴方が完全に転生するには、封じているファントムさんに絶望を知
ってもらいましょう」

ファ

「……だからエミリアとナギサを逃がしたのか？
鬼畜だな……」

アル

「ここは僕が対処します。

ファントムさんは……

……わかりますね？」

ファ

「わかってる」

剣影をアルベルトに渡す。

アル

「何です？」

ファ

「念のためだ」

そう言い残すと、階段を登っていった。

アル

「念のため……か……」

……

シズルさんのcord“輪廻”

transmigration of souls
TMGOSの有用性が出てきましたね……」

何かを考え出した……

そんな顔を見ると、同胞の治療を始めた。

4章：0 命消えるまで（後書き）

全部の謎を吐き出そうと思ったけど……

まだ引きずるのかよ!？

シヌに洗いざらい話してもらいましょう。

4章：1 “完全”（前書き）

ファントム……

これはマズイんじゃないのか……？

4章：1 “完全”

クラッド6

リトルウィング

開かなかった扉が開き、ロビーへ向かうエミリアとナギサ。

エミ

「アタシはファントムの部屋へ行ってみる」

ナギ

「わかった。」

私は事務所へ行く」

2人はロビーに入ると、別々の場所へ向かった。

—
—
—
—
—
—
—
—

リトルウイング事務所

ナギサは最初に、受付嬢のチェルシーのところへ行く。

チェ

「オ帰りね、ナギ……」

ナギ

「チェルシー、マリは？」

チェ

「マリ？

マリは……」

マリ

「ここだよ」

仕事帰りのようで、事務所の外からやって来た。

ナギ

「マリ……！」

ファントムが

“制裁者が来る”と……」

マリ

「……！！」

……

そっか……ファントムはアナタ達に話していないのね……」

ナギ

「話……だと？」

マリ

「制裁者が来る」……
……てことは、応援を呼べって事ね」

マリは携帯を取り出し、シヌに繋げる。

ナギ

「マリ！

話とは何なんだ？」

騒がしくなったせいか、クラウチやウルスラも集まる。

クラ

「どうしたんだ？」

エミ

「あ、居た！」

部屋にマリが居なかったので、事務所に来たエミリア。

マリ

「早めに来てよ」

携帯を切る。

ナギ

「貴方とファントムは何を隠している……！？」

エミ

「うわ！ ファントムって隠し事が酷いけど、マリも何か隠してるの？」

マリ

「……………」

しょうがない…………話すよ」

マリは、シヌとミレイに話された事を話す。
勿論、マリが知っているのは嘘の話だが……

クラ

「本当なのか…………そりゃ？」

ウル

「嘘でなくとも、信じられない話だわ」

ナギ

「何でまた…………」

全く、あの人は…………」

エミ

「制裁者…………」

.....

（ん？ 何か懐かしい気分が……）
」

マリ

「すぐにシヌ達が来るよ。

到着したら、その遺跡に行こう」

ヴィーン！ ヴィーン！

リトルウィングの警報が鳴り響いた。

—
—
—
—
—
—
—
—

チェ

「停船所からロビーまで損壊。
目標はロビーで停止中」

ドゴオオオオオオン！！

ロビーの転送装置が破壊され、煙が立ち込める。

何があったと、エミリア達が確認しに行く。

エミ

「なんなの……!？」

煙から出てきたのは……

ファ制

「ただいま。」

……なんてな」

ナギ

「ファントム……?」

これは……一体?」

ファ

「さあ? 何だと思う?」

サングを持ち、エミリア達へ向かう。

するとマリがM82A1をファントムに構えた。

エミ

「ちょ!?! 何やってんの!?!」

マリ

「わからない?」

アイツ……ファントムじゃない。
体はファントム自身の様だけど」

エミ

「はい?」

ナギ

「……………」

そういえば……

ファントムは通信の時に
もし帰っても…殺せ、と……」

ファ制

「……そんな事を言ったのか……
まあ、別に構わないが」

歩き出すファントム。

マリ

「止まって！」

ファ

「撃ってみろ。」

でないと君達は死ぬぞ」

マリの前に立ち、サンゲを振る。

マリ

「クッ……」

ガキン！

グッダ・ラス・レオルドがサンゲの攻撃を防御する。

ファ制

「クラウチか……」

クラ

「本当にファントムじゃねえのか？」

ウル

「ハッ！」

グッダ・ラス・ガヴリコンが、サンゲを持つ手に絡み付く。

ファ

「ウルスラ……」

ウル

「本物のファントムを出しなさい」

ガチャ

ファントムの後頭部に、シツガ・ラス・ヴァーゴが突きつけられる。

ファ制

「いい気分しないな……チエルシー」

チェ

「スタンモードダケド、結構痛いわよ」

ファ制

「“完全”たる私に齒向かうとは……」

グン！ とウィップごとウルスラを引いた。

ヤシャをトランスし、胸に突き刺す。

ウル

「ウツ！」

クラ

「！！！」

テメエエエ！！！」

チエルシーの銃撃と、クラウチのパンチが同時に行われる。

しかし……“外れた”

動いていないのに……

ファ制

「拍子抜けだ」

体を回転させ、クラウチとチェルシーを斬った。

マリ

「まずい……」

遂にマリも銃撃する。

しかし……“外れた”

マリ

「!？」

ファ制

「ファントムの恋人か……」

大量虐殺やエミリアやナギサよりも面白い……」

刀は降り下ろされた……

4章：1 “完全” (後書き)

シヌも早く来いって！

4章::2 　　く正夢く（前書き）

修正不可能な位、悲劇的な状況w

4章：2 正夢

「や……やめ……グワァ！」

「ファントム！ 何故……ウツ……！」

「止まれええええええ！！
……ゲホッ……」

「デメエ……ガハッ！」

「ば……化物が……」

—
—
—
—
—
—
—
—
—

リトルウィング
ロビー

ファ制

「今ので最後か……」

サンゲヤシャに付いた血を舐めとり、落ち着いて武器を仕舞う。
何故ならリトルウイングに現在、生存者はいなくなったからだ。

誰にも容赦はしなかった。

トニオとリィナの子供にも手をかけた。

今のリトルウイングは、ファントムが夢で見た様に血で染められている。

ファ制

「ファントム。

まさに正夢じゃないか？　これは……

……

……

絶望して、歯向かう気にもならないか？

……って……うっ……」

ファントム制裁者はふらつき、片膝を突いた。

ファ制

「まだ刃は錆びていないみたいだな……
だが……」

そうやって邪魔しても……

シヌ

「意味が無いか？」

ガタン！

シヌとミレイが、ダクトの中から出てきた。

ファ制

「シヌ……」

遅かったな……既に手遅れだぞ」

立ち上がり、シヌと同じ目線に合わせる。

シヌ

「そうか？

俺にはまだ、希望がある」

ファ制

「希望？

フン……

絶望その物だったお前が言うのと、酷く滑稽だな」

サンゲヤシャを取り出し、シヌに斬りかかる。

サンゲをシヌの黒餓で抑え、ヤシャをミレイの光フォトンが防御する。

ミレ

「星霊祭時の力が出ていませんね」

シヌ

「コクイントウは持ち主の感情に呼応して力が発揮する。
今は制裁者……

“ファントム・イリア”

だから、力が発揮されない」

ファ制

「随分と余裕だな」

サングをシヌから放し、ミレイの光フォトンのバリアを壊す。

ミレ

「！」

シヌ

「チッ……」

イリアはサンゲをミレイの首に当て、ヤシャをシヌに向けた。

ファ制

「お前とは仲良く出来ると思ったんだがな……」

神の存在を知ってまでも、私と同じ道を歩まないのか？」

シヌ

「俺は神を恨んでいない。

恨んでいるのはお前達、神病感染者と人間だ」

ファ制

「残念だ」

イリアはミレイの首を斬ろうとするが……

ファ制

「……………」

さっきはいい女を殺してしまったからな……

ミレイ・ミクナ……

確か星霊になったんだっとな。

神を犯すってのはどんな気分だろうな？」

普通のファントムなら見せない、狂気的な笑みを見せる。

シヌ

「そう言うと思った……

やはり、希望はまだあった」

ファ制

「何……？」

……！！……グッ！……

またか……」

サンゲヤシャを落とし、後退するイリア。

シヌ

「お前はファントム君とは違い過ぎる。

転生するにあたって必要なのは“類似点”……しかしお前は、名前と見た目だけしか類似していない。

希望とは、お前に似ていないファントム君なんだよ」

ファ制

「……チツ……」

やはり、剣影を渡しといて良かった。

………

これで終わると思うな……

私は同胞達によって絶対に蘇る」

シヌ

「せいぜいガンバレ」

“ファントム”は膝から崩れ落ちた。

ゆつくり立ち上がる。
下を向いている……

フア
「ハア……ハア……」

—
—
—
—
—
—
—
—
—

シヌ

「大丈夫か？」

シヌがファントムに近づく……

ファ

「！！！！」

ダメだ！ 近づくな！」

すぐにシヌから離れる。

シヌ

「？」

ファ

「俺は……」

これ以上……ヒトを殺したくない……」

シヌ

「何を言っているだ？」

殺したのは君じゃない、イリアだ」

ファ

「そんな事はわかってる！！」

だが止められなかった！

……アイツは……

恋人を殺し、パートナーを殺し、上司を殺し、同僚を殺し……

それなのに……

俺は止められなかった！

殺したも同然だ！！

クソ……！

クソクソクソクソクソクソクソクソ！！！

……………

またいつ殺すかわからない……

次は……仲間になりかけていたお前まで殺すかもしれない……」

M92Fをこめかみに当てる。

シヌ

「……………」

ファ

「俺はここで死ぬ……
生きている意味が……
意味が無い………」

引き金が引かれ……

バン！

鉛玉は天井に命中した。

銃は光フォトンによって弾かれ、遠くへ飛んだ。

ミレ

「光よ、彼を眠らせなさい」

ソフトボール程の光球をファントムにヒットさせる。

すると、ファントムは眠ってしまった。

シヌ

「睡眠効果か……好都合だ。

このまま運んで……

……」

ミレイはシヌに光の剣を向けた。

シヌ

「どうした？」

ミレ

「説明して下さい。」

何故貴方は……

リトルウィングの皆さんが全滅した後に、ファントム・イリアと接触したんですか？

助けていれば、全滅はしなかったはずですよ」

シヌ

「……………」

これが、ファントム君の仲間思いの代償だ。

ファントム君の心は死んだ。

これで仕事がスムーズに進む」

光の剣を手で払う。

シヌ

「それと……」

このまま殺すのは、神に背く行為だ。
ケジメはつける」

ミレ

「……………」

ちゃんと説明はしてもらいます」

ミレイはファントムを重そうに抱えると、ダクトへ引っ張っていった。

シヌ

「端から見たらホラーだな……あの絵面……
……………」

さて、俺の体が持てば良いが……」

シヌは死体の1つに近づいていった。

4章：2 正夢（後書き）

バトルが欲しい。

派手な感じで（笑）

4章：終　　ゝ失踪ゝ（前書き）

4章、短いな……

4章：終　　ゝ失踪ゝ

ニューデイズ

キラビ山　山荘

深夜

ニューデイズの主要都市近くのキラビ山に、大きくて豪華な山荘がある。

所有者はグラール教団であり、他にも幾つか存在する。

教団の元高官が無駄遣いで建てたらしく、そのまま無駄にするのも良くないとの事で、宿泊施設または現高官が慰安用に使っている。

キラビ山の山荘は後者であり、ミレイがカレンに頼んで借りている。

山荘内

ミレイはファントムを個室に寝かせると、リビングでシヌにコーヒーを出していた。

ミレ

「大丈夫ですか？」

シヌ

「大丈夫じゃない」

シヌの髪は真っ白になり、頬が痩けている。

ミレ

「力を使い過ぎです。」

だから早く助ければ……

……

そう……説明がまだでしたね」

シヌ

「……………」

転生出来る条件は類似点だ。

出来るだけ類似点を引き離す様にして、イリアにリトルウイングを皆殺しにさせた。

“完全”のイリアは絶望を知った事が無い。

ファントム君が絶望を知った今、転生は暫くは不可能」

ミレ

「だから見て見ぬふりをしたんですか……!?!?」

シヌ

「そうだ。

だが俺は生き返らした。

この姿になるまで力を使ってな」

軽蔑の眼差しを送るミレイ。

シヌ

「そんな目で見るな。
結果的にファントム君はこっちの仲間になって、仕事がスムーズに
終わる」

ミレ

「……確かにそうですが……
貴方は差別を感じてはいないのですか？」

シヌ

「言いたい事はわかる。
今回の犠牲者を生き返らして、少し前の犠牲者を生き返らせないの
は不平等だと言う事だろ？」

ミレ

「そうです」

シヌはコーヒーに口を付ける。

シヌ

「熱っ！

……

.....

お望みなら生き返らずぞ。
だが良いとは思わない」

ミレ

「どういう意味です？」

シヌ

「そうやって1人1人に情けをかけて、何人生き返らせる？
……今回は俺の勝手で生き返らせた。
だが知り合いでも無い奴に肩入れする気は起こらない。
他人を助けたいなら自分でどうにかしろ」

ミレ

「.....」

不機嫌な顔をするミレイ。

シヌ

「君の言っている事は間違っていない。
だが平等性を考えるなら、君は間違っている」

ミレ

「……………」

「……かも……知れない……ですね……」

シヌ

「……………」

白けた……俺が言った事は忘れろ。

俺は寝るから、ファントム君が起きたら呼んでくれ。

ファントム君にも説明が必要だからな」

コーヒーを残しリビングを後にした。

—
—
—
—
—
—
—
—

制裁者達の潜伏場所

楕円形のテーブルに座っている制裁者達。
3っ席が空いている。

アン

「ファントム様の転生が失敗？」

アル

「恐らくは……」

シヌさんが何かしたのでしょう……
これを見て下さい」

アルベルトはテーブルに付いているテレビに電源を入れる。
他の制裁者達もテレビの電源を入れる。

グラールチャンネル5に合わせる。

現在放送しているのは、リトルウィング襲撃事件についてのようだ。

アル

「ファントムさんはリトルウィングの社員を皆殺しにしたはずですが……

シヌさんが生き返らせたのでしょうか……

あの人は僕達の考えを知っていたんじゃないんでしょうか？」

ロド

「何じゃと？」

アル

「つまり、シヌさんはこの事件を予想してたんです。

僕達は、ファントムが絶望で精神が消えると予想していましたが……

シヌさんは逆に、絶望が転生を妨げると予想していたのでしょうか。

そしてファントムさんの転生は当分は無いですね。

やられました……」

リゼ

「ではどうする？」

生き返ったエミリアとナギサを戦力にしますか？」

アル

「シズルさんがこちら側なので、これ以上リトルウィングの友人が行方不明になれば……

僕達の活動は難しくなります。

今は諦めて……

………

……そうですね……

では、シズルさんの

cord“輪廻”

TMGOSを使って行いたい事があります。

………

………

それと……そろそろ制裁を始めても良いかも知れませんか……」

アルベルトは無表情だったが……

他の制裁者は嬉しそうな顔をした。

—
—
—
—
—
—
—
—

クラッド6

リトルウィング事務所

リトルウィング中が血塗れ……

しかし、社員の全員が無傷の状態だった。

現場調査に来たガーディアンズも戸惑っている。

クラ

「だから……！」

この映像のファントムはファントムじゃないんだって！」

クラウチはガーディアンズ隊員に防犯カメラの映像を見せて必死に説明するが、ファントムがファントムじゃないと言われたら良くわからないだろう……

ガ隊員

「……意味がさっぱり……」

ルミ

「もう良いですよ。」

貴方はロビーの方へ」

ガ隊員

「教官……了解です」

ルミアが戸惑っている隊員をロビーへ向かわせる。

クラ

「ルミアか……」

お前ならわかりそうだ」

ルミ

「……………」

クラウチさん……

……ファントムさんの指名手配が決定しました……」

クラ

「ハア!？」

……あ、いや……

見つけるには好都……

ルミ

「危険性が高いとの事で、非逮捕命令が発令されています」

クラ

「非逮捕命令……だと……?」

ルミ

「危険だと見受けられた場合………」

言葉を濁すルミア。

クラウチも暗い顔をする。

ルミ

「私は……」

ファントムさんがこんな事するとは思っていません。
信じていますから！」

クラ

「……ああ……」

ルミ

「そう言えば……
エミリア達は？」

クラウチは当たりを見渡して、ルミアに耳打ちする。

クラ

「（シヌを探しに行った。

防犯カメラには映っていないんだが、俺らを治したのはシヌらしい
……）」

ルミ

「（え？ シヌが？）」

クラ

「(あんまり言うなよ。

シヌとミレイは、カレンと一緒にいるみたいだぞ)」

伝え終わると、ルミアから離れた。

クラ

「非逮捕命令ってのは、その場で殺されるかもしれないんだろう？
しかも懸賞金もかけられる。

俺達は、賞金稼ぎやガーディアンズよりも早く見つける」

ルミ

「賞金稼ぎはわかりませんが、ガーディアンズはファントムさんの
強さを知っているヒトもいます。

いきなり戦う事は無いと思いますよ。

……………

あ、そうだ。

社員の皆さんは、検診を受けるようにと通達されていますよ」

クラ

「まあ、生き返ったなら当然……なのか？」

—
—
—
—
—
—
—
—

ガーディアンズ
ニューデイズ支部

エミリア達は受付に、カレンを出すように言ったが……
カレンは出掛けているようだ。

イライラしながらも待っていると……

カレ

「すまない……」

遅くなっ……た……」

3人の鬼気迫る表情にたじろくカレン。

マリ

「カレンさん、シヌと会いたいんですけど」

カレ

「いや…知らないが……」

ナギ

「マリが言うには、シヌはミレ……」

ナギサの口を塞ぐマリ。

マリ

「無闇にそのヒト名前は言わないの」

エミ

「……マリの電話からじゃ繋がらないの。」

カレンさんなら知っていると思ったんだけど……」

カレ

「そうか……」

実は、最近会っていないんだ」

マリは眉を動かした。

マリ

「そうですか。」

じゃあ連絡がついたら教えてく下さい」

エミリアとナギサを連れて、ガーディアンズを出ていった。

カレ

「これで良いのか？」

物陰からシヌが現れた。

まだ白髪で、頬が痩けている。

シヌ

「完璧な嘘だ。

マリの読心術は、俺が君の心にAフォトンを張ったから問題無いだろう」

カレ

「……お前は何がしたいんだ？
ファントムの行方など隠して……」

シヌ

「……わからない。」

一体俺は何の為に

戦って、

嘘ついて、

疲れるんだか……

……

……

まあ俺は別に良い。

君の妹は、俺の勝手な行動に干渉していない。

いつもと変わらずに接してやってくれ」

シヌは黒いフードを被ると、ガーディアンズを後にした。

カレ

「ファントムに聞いた程……悪い奴じゃないのか？」

———

ガーディアンズ
ニューデイズ支部前

マリはゆっくり歩きながら、考え事をしているようだ。

エミ

「どうしたの？」

マリ

「うーん……」

カレンさんの心を読もうとしたんだけど……」

ナギ

「どうかしたのか？」

マリ

「前にファントムに対して肝試ししたよね？」

あの時のファントムみたいに、心が読めなかった……
まあ肝試しの時は、ファントムが特別な状態だったというのもある
んだけど」

エミ

「カレンさんは違うって？」

マリ

「平常そのままだからね。

凄く不思議……

……………

しょうがない……

草の根搔き分ける気持ちで探そう」

何処と無く呑気に見えたが、エミリアとナギサが見たのは……

マリの真剣な目だった。

4章：終　　ゝ失踪ゝ（後書き）

結局

“輪廻○○の地”

の謎がわからぬまま。

いずれわかるんで少々お待ちを。

次項は、

12の制裁者の詳細プロフィール、全員分です。

え？　何故今になって？

5章から本格始動なんで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5272y/>

ファンタシースターポータブル2∞ 偽神達の転生（日常編続き）

2011年12月17日22時50分発行